

LEFT

24ColorCard Camera-Cray.com



APRIL 2013



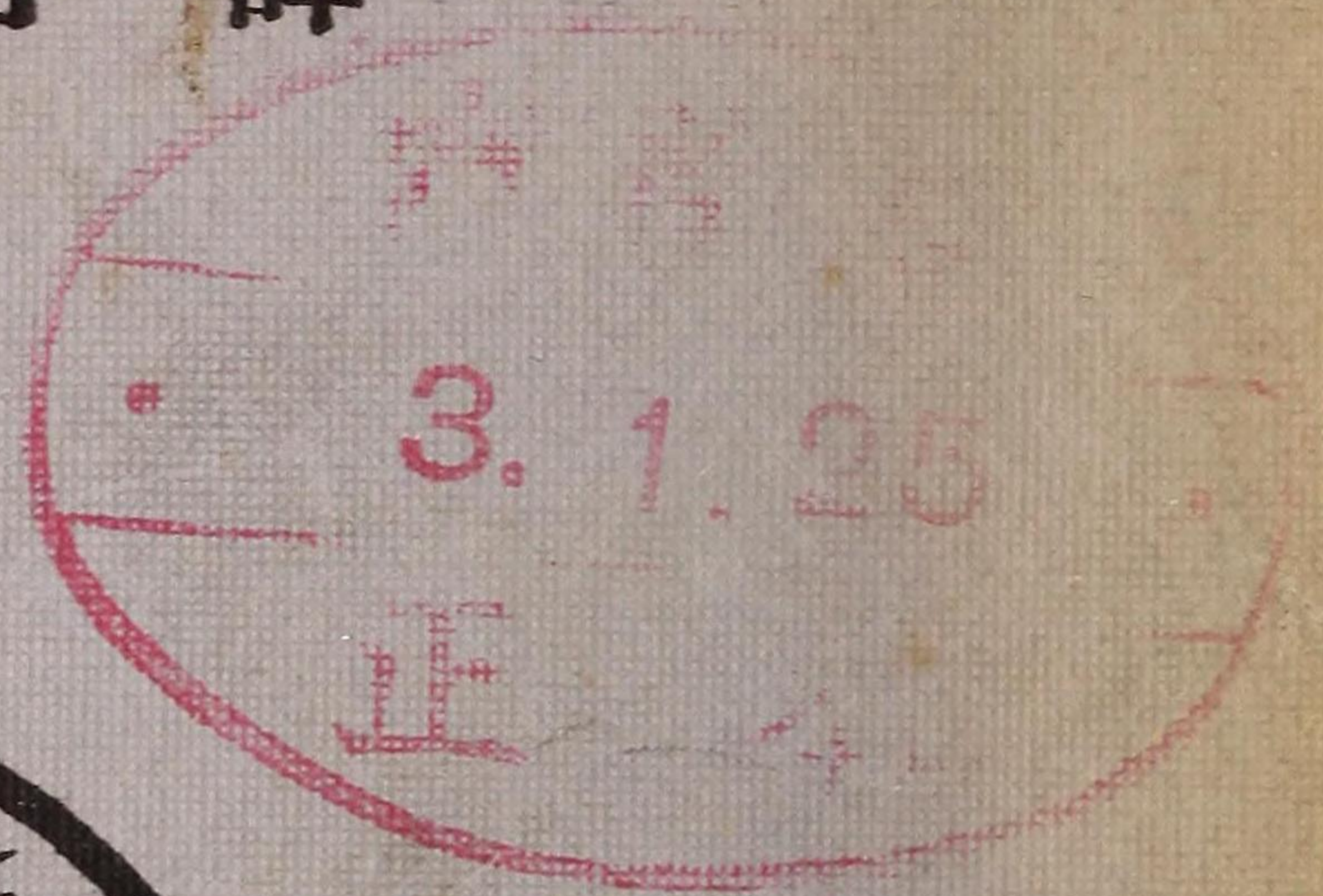
HUAJIE H.3201

HUAJIE H.3201

HUAJIE H.3201

論 義 主 國 帝

著 者
吉 野 青
譯 者
吉 野 青



編 三 十 第 叢 書 ニ レ

天水回

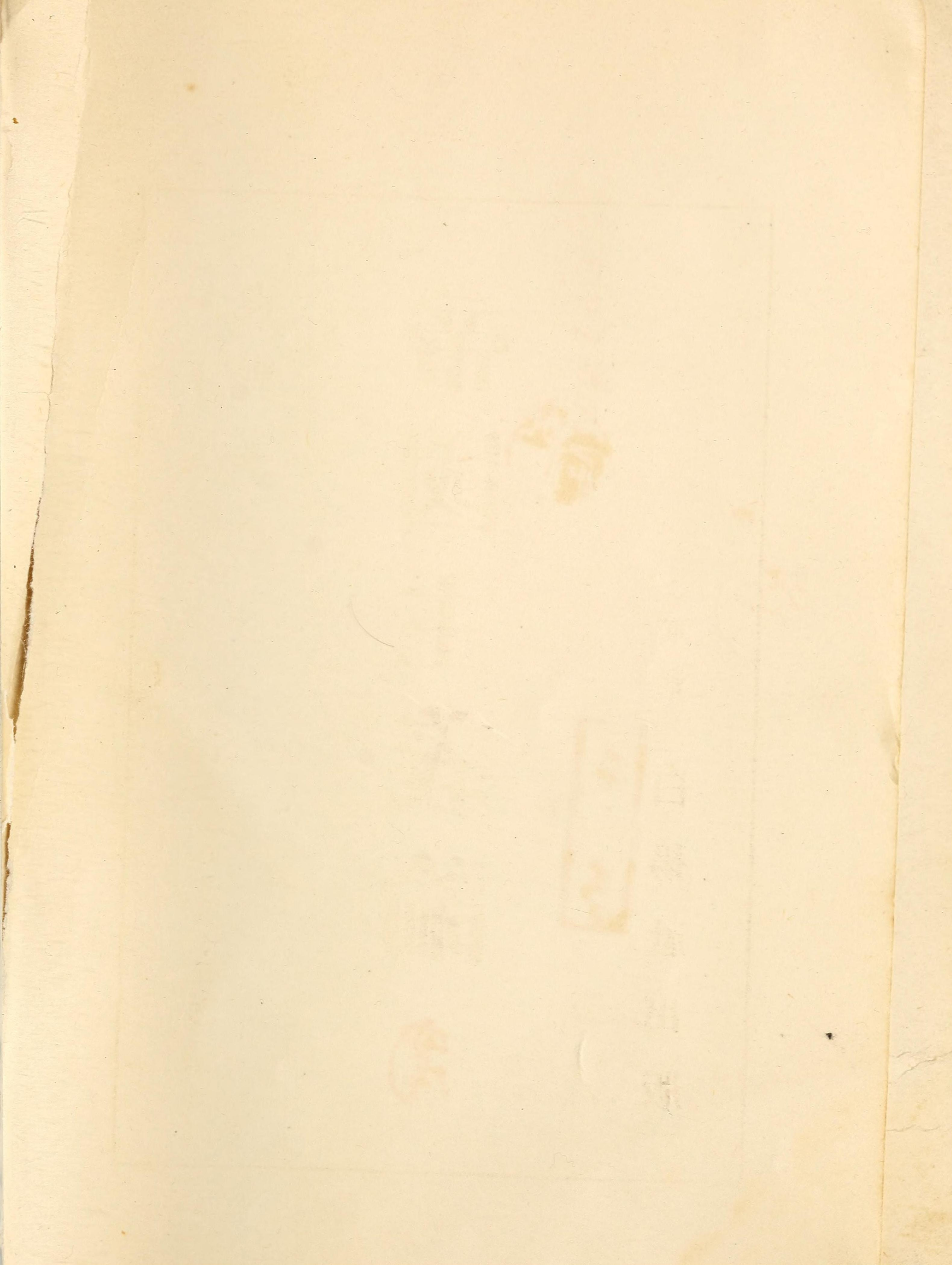
井上正林

圖書課



事務官





Lenin, Vladimir Ilich

レ
ー
ニ
ン
著
青
野
季
吉
譯

(レ
ー
ニ
ン
叢
書
第
十
三
編)

帝
國
主
義
論

東
京
白
揚
社
出
版

HB 501

L3316

1928

Copy 1

Asian

Japan

Cage

LC Control Number



2001 534874

新譯について

私が曩にこの書を反譯出版——一九二四年六月、及び一九二五年十一月（改訂版）——した時、その反譯の臺本としたものは、ビブリオテーク・デル・コンムニステイツシエン・インターナチヨナールの第九編（一九二二年發行）の獨逸譯本であつたが、この新譯では、その後に發行されたマルクイステイツシエ・ビブリオテーク第一編（ウエルトハイム版）の獨逸譯本を臺本とし、兼ねて先の臺本と、イギリス共産黨發行の英譯本とを參考とした。だが前の臺本にしたがつた譯文中、後の臺本と對照して見て保存し得る個所は、なるべく之を保存することにした。

なほこんど卷末に同著者の『社會主義の分裂と帝國主義』を附録として添えた。この一編は専ら帝國主義の經濟的基礎を取扱つた『帝國主義論』にたいして、恰も補足的の意義を持つものだと考へたからである。

一九二八・一・二一

譯

者

ロシア版への序言

私がいま讀者に提供する書は、一九一六年の春、チューリッヒにおいて書かれたものである。そこで仕事をした關係から、私は當然、フランス文献及びイギリス文献の缺乏に惱まされ、ロシア文献には更に一層ひどい缺乏に惱まされた。しかしヂュー・エイ・ホブソンの帝國主義に關する基礎的なイギリス書はこれを、多大の注意を拂つて利用することが出來た。その書物は、實際、それに値すると私は信ずる。

この書はツァー政治の檢閲を念頭において書かれたものである。その理由から、私は私の仕事を、嚴に理論的——特に經濟的——解剖に局限しなければならなかつたばかりでなく、わづかな無くて叶はぬ政治的關説をも多大の注意をもつて記し、示唆的に、或部分では譬喩を用ひて、凡ての革命家がツァー政治の下において、何等か「合法的なもの」を書かうとしてペンを執ればすぐ、どうしてもそれによらざるを得なかつたかの忌々しい譬喩を用ひて、語らなければ

ならなかつた。

今日、自由の日において、この小冊子のうち、ツアー政治の檢閲を念頭においたために、不具にせられ、云はゞ鐵の螺旋に締付られてゐる個所を讀み返すことは、眞に苦痛である。帝國主義は社會主義の前夜を意味するといふこと、社會愛國主義（言葉で社會主義を唱へ、行爲で愛國主義を執る）は、社會主義にたいする全き裏切り、ブルジョアジーへの完全な轉移と同意義であるといふこと、労働運動の内部におけるこの分裂は、帝國主義の客觀的條件に關聯してゐるといふこと等——それに関して私は「奴隸の言葉」をもつて述べなければならなかつた。だから、この問題に興味を有する讀者は、一九一四年から一九一七年にかけて、私が外國に在つて草した諸論文を見ていたゞき度い。（近くこれらの論文の新版が上梓される筈である。）特にその目立つのは、第九章の終末の或る個所で、私はそこで、資本家と、その陣營に投じた社會愛國主義者（カウツキーはこれに向つて辻褃の合はぬ攻撃をしてゐる）とが、領土併合の問題において、いかに厚顏無恥に嘘をついてゐるか、愛國社會主義者が、自國の資本家の領土併合を、いかに厚顏無恥に虚飾してゐるかを檢閲の許す範圍において、讀者に明瞭ならしめるために、

例證として……止むなく日本を選び出して來なければならなかつた！注意深い讀者は容易に、日本の代りにロシアを、朝鮮の代りにフィンランド、ポーランド、クールランド、ウクライナ、支那、ボカラ、エストニア及び大ロシア人以外の人民の居住してゐる他の地域を置きかへて讀むであらう。（譯者はその個所へ註を加へておいた。）

私はこの小冊子が、それを研究すること無しには、今日の戦争及び今日の政治が絶対に理解されないところの、經濟的基礎の闡明に、即ち帝國主義の經濟的本質の問題の闡明に、貢獻するところあらんことを希望する。

一九一七年四月二十六日

ペトログラードにて

フランス版及ドイツ版への序言

—

この書は、曩にロシア版の序文のうちに述べた如く、一九一六年に、ツアー政治の檢閲を考慮しながら、書かれたものである。私はいま到底、この書の全文を改訂することは出来ない、それはまた恐らく、無益なことでもあらう。といふのは、この書の主要任務は依然として、争ふ可からざるブルジョア統計の總括的報告と、凡ての國のブルジョア學者の自白とを用ひて、資本主義世界經濟の總果を示し、最初の帝國主義世界戦争の前夜、二十世紀初頭におけるその實際的相互關係を解明することにあるからである。

檢閲の立場から合法的とされたこの書を見習つて、わづかに残された合法範圍でもそれを利用して、社會平和主義者の「世界民主主義」の見解と希望の全然虚偽なることを指摘することが

可能である——且つ必要である——と確信することは、最先進資本主義諸國の共產主義者達にとつて、恐らく幾分有益なこととてさへあらう。その僅かな合法範圍は、最近ほとんど凡ての共產主義者が投獄されたが、なほ今日のアメリカ及びフランスにおいて、共產主義者に残されてゐるものである。

檢閲の手をへて來た本書には、若干の補遺が必要であるから、私はこの序言でそれを述べるであらう。

二

この書において、一九一四——一九一八年の戦争は、双方の側から見て、帝國主義戦争（即ち、侵略戦争、掠奪戦争）であり、世界支配分割のための戦争、植民地の分割及び新分割のための戦争、金融資本の「勢力圏」のための戦争等であつたことが論證されてゐる。

戦争の實際の社會的性質、もつと正確に云へば、その實際の階級的性質を證明するためには、我々は勿論、戦争の外交史を研究する必要なく、凡ての戦争參加國の支配階級の客觀的地位を

分析しなければならぬ。而してその客觀的地位を描き出すためには個々の實例や個々の報告を抜きとつて來たのでは、決して十分ではなく、(何となれば、社會的生活の諸現象は複雑極まりないものであるから、そのなかから心要なだけの實例や、個々の報告を集めて來て、思ひのまゝの論題を確證することは、いつでも出来ることだから) 少しの缺陷もない證明を與へるためには、凡ての戦争參加國及び全世界の經濟生活の基礎に關する報告を總括することが無條件に肝要である。

私が、一八七六年及び一九一四年における世界分割(第六章)、一八九〇年及び一九一三年における全世界の鐵道分割(第七章)を描くために、この書に引用してある、論駁することの出來ぬ總括的報告は、正にその種のものである。鐵道は、資本主義産業の最主要部門、石炭業及び鐵工業の總果である——總果であると同時にそれは、世界貿易及びブルジョア民主主義的文明の、發達を極めて明白に示す分度器である。鐵道が、大工業、獨占、シンヂケート、カルテル、トラスト、銀行、金融寡頭政治と、いかに緊密に結びついてゐるかは、この書の右の章に示されてゐる。鐵道網の分割、その分割及び鐵道發達の不均衡——これは何れも、全世界に亘つて

の、近代的獨占的資本主義の生んだ結果である。しかしてこれらの結果は、その經濟的基礎が存續する爲めには、生産手段の私有制が依然として存在する限り、帝國主義戦争の絶對に不可避であることを、明示してゐる。

外見だけで云へばなるほど、鐵道の敷設は、單純な、自然的な、文化的な、文明的な企業である。事實また、資本主義的奴隸制を修飾して報酬をもらつてゐるブルジョア大學教授や、ブルジョア俗輩の眼には、鐵道の敷設がそう云ふ企業に見える。しかし實際においては、この企業は、無數の資本主義の絲で、生産手段一般の私有制と纏れ合つて結び付いてゐるのである。その結果、この企業は、鐵道の敷設を、(植民地及び半植民地の)十億の人類にたいする、言ひ換へれば、隸屬國における地表の大半を占めてゐる人民、及び「文明」國における資本の賃銀奴隸にたいする、抑壓手段に變へて仕舞つたのである。

小生産者に基礎を置いてゐる私有制、自由競争、民主主義——資本家とその御用新聞とは、それらの一切の標語をかゝけて、労働者と農民を瞞着してゐるが、それらはとうの昔に、過去のものとなつて仕舞つてゐる。資本主義は、小數の「先進」國による、世界人口のどえらい多數

の、植民地的抑壓及び金融的絞搾の世界組織へと發展した。二―三の世界を股にかけてゐる大泥棒（アメリカ、イギリス、へ△）は、爪先までも武装して、その「分捕品」を分け取りにし、彼等の分捕品を分けるための彼等の戦争へ、凡ての大陸を捲込む。

三

王政ドイツによつて口授されたブレスト・リトウスク媾和、それについて、「民主々義」共和国のアメリカ及びフランス並に「自由な」イギリスによつて口授された一層残酷で卑劣なヴェルサイユ媾和は、人類にとつて一つの測る可からざる貢献をした。その二つの媾和は、「ウイルソン主義」を賞讃し、帝國主義の下における平和と改良の可能を證明しやうと努めたところの、帝國主義の御用ペン奴隸及び反動的小ブルジョア——假令彼等が平和主義者や社會主義者と自稱しやうとも——の假面を剥ぎ取つたのである。

イギリス側とドイツ側と、二つの金融的泥棒群が、分捕品のために起した戦争は、數百萬の人類を殺し、不具者にした。この戦争の犠牲と、それからかの二つの「平和條約」とは、嘗つて知

らなかつた速さをもつて、數百萬數千萬の、ブルジョアジーによつて抑壓され、打ちのめされ、愚弄された人々を覺醒させてゐる。かくして、戦争によつて惹起された一般的窮乏の大地の上に、一般的な革命の危機が発生してゐる。それは——いかに長い、困難な小解決を経やうとも——無産階級革命の勝利をもつて、局を結ばざるを得ないものである。

第二インタナショナルのバーゼル宣言が、一九一二年に明示したのは、一九一四年に勃發したこの戦争であつて、戦獨一般ではない。(何となれば、戦争にはいろんな種類があり得る。そこには革命戦争もある。)この宣言は今日、第二インタナショナルの勇士達の不面目千萬な破産、一般的變節の記念碑となつてゐる。それ故に、私は、この書の現版の附録として、その宣言を再掲し(この譯書には添加しない——譯者)第二インタナショナルの勇士達が、その宣言の中、今次の戦争と無産階級革命との關係の歴然簡明に論ぜられてゐる凡ての個所を、注意深く避けて通つてゐる事實について、強く讀者の注意を促した。——彼等は實に、泥棒が盗みをした場所を避けて通る時の用心深さで、避けて通つてゐる。

この書には、世界のすべての國々において、「最も卓越せる理論家」によつて、第二インターナショナルの指導者（オーストリアではオットー・バウエル等、イギリスではラムゼー・マクドナルド等、フランスではアルベール・トーマ等、等）によつて及び多數の社會主義者、改良主義者、平和主義者、ブルジョア民主主義者並に坊主共によつて代表されてゐるところの、かの國際的思潮たるカウツキー主義が、特に徹底的に批評されてゐる。

この精神的傾向は、一方に於て第二インターナショナルの解體、崩壞の産物であり、他方それはまた、そのあらゆる生活上の地位のためにブルジョア的、民主主義的偏見の羈絆を脱し得ない小ブルジョアのイデオロギーの、不可避的果實である。

カウツキー及び彼と同性質の他の多くの人々にとつては、この種の見解は、カウツキーが十年の長きにわたつて、特に社會主義的日和見主義者（ベルンシュタイン、ミルラン、ハインドマン、ゴンバース等）との論戦において擁護したところの、かのマルクス主義の革命的基礎の完

全な放棄以外の何ものでもない。さればカウツキー主義者が今、全世界に於ける極端な日和見主義と（第二即ち黄色インタナショナルを通じて）實踐的・政治的に結び付き、ブルジョア政府と（社會主義者の参加せるブルジョア聯立政府を通じて）結び付いたのは、何等偶然なことではない。

遍く全世界に生長してゐる無産階級革命運動及び特に共產主義運動は、「カウツキー派」の理論的缺陷の解剖と暴露とを企てることなしには、決して發展することは出来ない。その上、平和主義及び一般に「民主主義」が、世界において、まだ強く傳播されてゐるのであるから、その事は更に一層必要である。それらの教説はマルクス主義であると自ら主張はしないが、しかしカウツキー一派と全く同じに、帝國主義的矛盾の内奥と、それから生れる革命的危機の不可避性とを、胡魔化そうとするものである。これらの思潮にたいする鬭争は、多かれ尠かれ小ブルジョアの關係の中に生活して居り、ブルジョアジーのために愚弄されてゐる小生産者及び數百萬の勤勞者の蒙を啓く任務を有する無産階級黨の、義務である。

五

この書第八章の「資本主義の寄生状態と衰頹」について、一言しておかなければならぬ。この書の本文に示されてゐる如く、以前は「マルクス主義者」で、今日はカウツキーの戦友であり、「ドイツ獨立社會民主黨」のブルジョア的、改良主義的政黨の領袖の一人であるヒルファーダイングは、この問題に關しては、公然の平和主義者改良主義者であるイギリスのホブソンに比して、一步退却してゐる。全労働者運動の國際的分裂は、今日、顯著な事實である（第二と第三インタナショナル）。而してこの二つの運動が公然の鬭争と市民戦争を導いて來てゐることも亦、今日、疑ひなき事實である。ロシアにおいては——メンシェヴィキと社會革命黨員が、コルチャックとデニキンを支持して、ボルシェヴィキに當り、ドイツにおいては——シャイデマン、ノスケが、ブルジョアジーと結合して、スバルタカスに當つた。同様なことは、フィンランド、ポーランド、ハンガリー等にも起つてゐる。然らば、この世界史的現象の經濟的基礎は何であるか？

その基礎は、資本主義の最高歴史的階段たる、帝國主義の階段に特有な、寄生状態と衰頹と

のうち在る。この書において詳説してある通り、資本主義は極く少數の（世界住民の十分の一よりも少く、大きく見積つて、高々五分の一よりも少い）特に富裕で強力な國家を生ぜしめた。——それらの少數國家は單なる「利札切り」で、全世界を掠奪してゐるのである。資本輸出は、年々八十億乃至百億の利益をもたらし、しかもそれが戦前の價格、ブルジョアの戦前の統計においてそうであつた。現在ではその利益は、更に巨大な額に達する。

かゝる巨大な超利潤（と云うふのは、資本家はこの利潤を、「自己の」國の労働者から搾取する利潤以上に、搔き集めるからである）が、ブルジョアジーに、労働指導者及び労働貴族の上層の買収を可能ならしめることは、明白である、事實、「先進」諸國の資本家は、それらを買収して居り、——しかも直接間接の、公然隠然の千差萬別的手段によつて、それをしてゐるのである。

このブルジョア化した労働者の層、即ち「労働貴族」は、その生活方法、その收入、その全世界觀に於て、徹頭徹尾ブルジョア的であり、第二インターナショナルの支柱であり、ブルジョアジーの社會的（軍事的でなく）支柱である。労働者運動におけるブルジョアジーの眞の手先、資本家

階級の労働將校、改良主義及び偏愛國主義の眞の傳達者は、彼等である。無産階級とブルジョアジーとの市民戦争において、彼等は不可避に、しかも大多數、ブルジョア側に味方する。「コンミュン派」に反對して、ヴェルサイユ派に味方する。

この現象の經濟的根基を把握すること無しには、その政治的社會的意義を評價すること無しには、共産主義運動及び來るべき社會革命の實際問題の解決を、一步も進めることは出來ぬ。帝國主義は、無産階級的社會革命の東天紅である。それは一九一七年このかた全世界において實證された。

一九二〇年七月六日

エヌ・レーニン

目次

新譯について

ロシヤ版への序言

フランス版及ドイツ版への序言

最新の資本主義

一 生産の集積と獨占

二 銀行の新役割

三 金融資本と金融寡頭政治

四 資本輸出

五 資本家團結間の世界分割

六 強國間の世界分割

一〇五

九〇

八二

五六

二九

五

三

七	資本主義の特殊段階としての帝國主義	一三四
八	資本主義の寄生状態と衰頽	一四二
九	帝國主義の批判	一五八
一〇	帝國主義の歴史的地位	一七九
註		一八八
附録	社會主義の分裂と帝國主義	一九九

帝國主義論

レーニン著
青野季吉譯

新譯

帝國主義論

原名
資本主義最新の段階としての帝國主義

最新の資本主義

最近十年乃至十五年間、特に米西戦争（一八九八年）及びボーア戦争（一八九九——一九〇二）の後、新舊兩世界の國民經濟文献ならびに政治文献において、吾々の生活してゐる時代の特性をあらはすために、「帝國主義」なる概念について説かれることが、ますます多くなつて來てゐる。一九〇二年に、ロンドン及びニューヨークにおいて、イギリスの國民經濟學者ジェー・エイ・ホブソンの「帝國主義」と題する著作が現はれた。著者は、社會改良主義及び平和主義の立場——その立場は、今日カール・カウツキーのとつてゐる立場と、本來同一なものである——をとつてゐる人であるが、帝國主義の基礎をなす經濟的、政治的特殊性の、非常に立派な詳細な記述を與へてゐる。一九一〇年に、ウヰンにおいて、オーストリーのマルクス主義者ルドルフ・ヒルファディングの著作、「金融資本」が現はれた。著者は貨幣理論において誤つた見解を示してゐるに拘らず、又、著者にはマルクス主義と日和見主義とを混同する傾向があるに拘ら

ず、この著作は、極めて高い價值のある理論的な、「資本主義の最近の發達に關する研究」——この書の傍題に記してある通り——を提供してゐる。近年帝國主義に關して述べられた凡てのこと、——特にこの問題に關して新聞雜誌の無數の論文において、ならびに、たとへば一九一二年の秋、チムニッツ及びバーゼルで開催された大會の決議において述べられた凡てのことは、本來この二人の著者が説いたところの、更に正確に云へば、この二人の著者が要約したところの、觀念の範圍を何等出づるものではない。

以下において私は、帝國主義の基礎的な經濟的諸特性の依存關係及び相關々係を、出来るだけ簡結平明な形で説明して見やうと思ふ。この問題の經濟的ならざる方面に關しては、——いかにそれが有益なものであるにせよ——私はこの書において説き及ぶ機會を持たないであらう。参考文献及びその他の註解は、必らずしも凡ての讀者に用はないが、この書の卷末にそれを附しておく。

一 生産の集積と獨占

産業のどえらい發達と、凡ての大企業における生産の著しく急激な集積過程とは、資本主義の極めて特徴的な諸特性の一つをなしてゐる。近代の産業統計は、この過程に關して、吾々に完全詳細な材料を提起してゐる。

たとへばドイツにおいて、産業企業各千のうち、大經營即ち五十人以上の賃銀労働者を使用してゐる經營は、一八八二年に三、一八九五年に六、一九〇七年に九であつた。而して労働者各百人のうち、それらの大經營に使用されてゐるものは、二二、三〇、三七であつた。しかし生産の集積は、労働者の集積よりは、多分にヨリ強度である。といふのは労働は、大經營のうちにあつて、多分にヨリ生産的だからである。このことは、蒸汽機械及び電動機に關する材料が證明してゐる。ドイツにおいて、極めて廣い意味に、即ち商業及び運輸等をふくめて、産業と呼んでゐるものゝ全體をとつて觀察すれば、次の表が描かれる。ドイツの企業三百二十六

萬五千六百二十三のうち、大企業は三萬五百五十八、即ち〇・九％に過ぎない、而もこれらの大企業は次の割合を占めてゐる、労働者一千四百四十萬のうち、五百七十萬、即ち三九・五％ 蒸汽機關八百八十萬馬力のうち、六百六十萬馬力、即ち七五％、電力一百五十萬キロワットのうち、一百二十萬キロワット、即ち約八〇％。

全企業の百分の一より尠いものが、蒸汽力及び電力の總量の四分の三以上を使用し、企業の全數の九一％を占める小經營（最高五人の労働者を使用するもの）三百十九萬七千は、全體で、蒸汽力及び電力の七％しか使用しない！ 三萬の大經營が凡てで、三百萬の小經營は何物でもない。

百人以上の労働者を使用する經營が、一九〇七年、ドイツにおいて、五百八十六あつた。これらの大經營は、労働者の全數の約十分の一（百二十八萬人）動力總量のほど三分の一（三二二％）を使用してゐた。（註一）

貨幣資本及び銀行は、後章で説明するやうに、極く少數の最大經營のこの優越を、ますます壓倒的たらしめ、しかも眞に文字通りに然るのである。即ち、數百萬の小、中、ならびに大「所

有主」の一部さへ、實際において、僅々數百の大金融家に完全に隸屬して仕舞ふ。

近代資本主義の發達した他の國家、すなはち北米合衆國においては、生産集積の増大は、更に一層強度に進んでゐる。アメリカの統計は、産業を狭い意味にとり、企業を年生産の價値によつて集めてある。一九〇四年には、百萬弗以上の年生産を有する大企業が一千九百（二十一萬六千八百八十のうち、即ち〇・九％）あつた、これらの大企業は一百四十萬の労働者（五百五十萬のうち、即ち二五・六％）を使用し、五十六億の年生産（一百四十八億弗のうち三八％）を有してゐた。五年後、一九〇九年には、對應する數字は次の通りであつた、すなはち、三千六十の企業（二十六萬八千四百九十一のうち、即ち一・一％）が二百萬の労働者（六百六十一萬のうち、即ち三〇・五％）を使用し、九十億の年生産（二百七億のうち、即ち四三・八％）を有してゐた。

（註二）

この國の全企業の生産總額の約半分が、經營總數の百分の一の大經營の手に在る！ 而して、この三千の巨人的經營は、二百五十八の産業部門を包擁してゐる。それによつて次のことが明瞭になる。集積は、一定の發達階段において、キチンと獨占に近づくといふこと、是である。

何となれば、僅々數十の企業が相互の間に、協定をとけることは容易であるし、同時に他方、彼等の経営の大規模であることが、競争を困難ならしめ、独占への傾向を生み出すからである。競争から独占へのこの變化は、最近資本主義經濟における、最重要的な諸現象の一つ——重要な現象でないにせよ——である。だから吾々はそれを審かに觀察せねばならぬ、しかし吾々は先づ第一に、一つの或は起り得可き誤解を除かねばならぬ。

アメリカ統計は、二百五十の産業部門に三千の巨人企業がある、と記載してゐる。それで見ると、各部門にこの種の企業が十二しかないやうに思はれる。しかし事實はそうでない。各産業部門に大經營が在るのでない、更に他方、高い發達階段に達した資本主義の一つの極めて重要な特徴は、いはゆる企業聯合コンピネーション即ち若干の大企業への諸産業部門の結合である。その産業部門が、原料の加工において、接續的な段階をなすもの（たとへば、鐵鑛の溶解、鋼鐵の製練、更に場合によつては各種の鋼鐵製品の製作の如き）もあれば、相互に補助的な作業を營むもの（たとへば廢物又は副産物の加工、包装材料の製造等の如き）もある。

ヒルファディングは述べてゐる「……企業聯合は、市況の差異を平均し、その結果、聯合態

事業にたいして、利潤率のヨリ大いなる安定を與へる。第二に、企業聯合は、商業の廢棄を實現する。第三に、それは、技術的進歩を可能ならしめ、その結果、純粹事業において得られぬ特別利潤を獲得せしめる。第四に、原料價格の下落と製品價格の下落とが平行しない極度の不景氣時の競争において、純粹事業にたいして聯合態事業の地位を強固ならしめる」(註三)

ドイツの大鐵工業における「混合態」ゲミッシュユテン即ち聯合態事業の叙述といふ特殊な研究に携つたドイツのブルジョア國民經濟學者ヘイマンは云つてゐる。「『純率』事業は、高い原料價格と、低い製品價格の間にはさまつて、押し潰される……」そこで次の如き結果が生ずる。「一方において、數百萬噸の石炭を搬出し、石炭シンジケートと緊密に結付いてゐる諸大石炭會社が残り、諸大鐵業と其鋼鐵シンジケートとは、それらの大石炭會社と密接に團結する。これら巨人的企業は、年々四十萬噸の鋼鐵を生産し、鑛石及び鑄鐵を多量に産出し、一萬人の労働者をもつて鋼鐵製品を製作する。それらの労働者はその附屬の工場町に準備されてゐるもので、往々それ自身の鐵道や埠頭を持つてゐる。この巨人的企業は、今日、ドイツ鐵工業の眞の典型である。個々の經營は、斷えずその規模を擴大する。同一種又は異種の經營が、益々巨人的企業に結合し、そ

れら巨人的企業はまた、若干のベルリン大銀行によつて支持され、指導される。かくて、鑛山業が、ドイツにおける如く、關稅及び運轉稅によつて保護される國に於ては、如何なる場合にも、カルル・マルクスの集積理論の正しいことが、確證される。ドイツの鑛山業は、今ま十分に、收奪してよい段階に達してゐる。」(註四)

かくの如く、この正直なブルジョア國民經濟學者は、この結論に到達せざるを得なかつた。彼は、高率の工業保護關稅を設けてゐるといふ點で、ドイツに或程度の特別地位を許してゐることに注意すべきである。しかしこの事情は、たゞ、生産の集積と、カルテル、シンジケート等の如き企業家の獨占團結の形成を、促進したに過ぎない。自由貿易國たるイギリスにおいて、多少は遅れ、又たとへ變つた形態においてにせよ、同様に生産の集積が獨占到赴いてゐるといふことは、極めて重要なことである。ヘルマン・レヴィ教授は、その専門的著書「獨占、カルテル及びトラスト」において、イギリスの經濟的發展に關する材料に基いて、次のやうに書いてゐる。

「イギリスにおいては、企業の規模の大きいことと、その管理力の優れてゐることとが、自らそ

のなかに獨占的傾向を持つ。そしてその傾向は次のやうにして高められる。一度び集積運動が始まると、各企業における資本投下額が大きくなり、その結果新しい企業は同じく巨額な資本を必要とし、従つてその成立が困難となる。しかしなほその上（これが吾々には最重要な點であると思はれる）、集積過程のうちに生じた巨人的企業と歩調を合せて進まふとする新企業は何れも、極めて多量の商品を生産しなければならぬ。それは極めて多量であるから、それを賣捌いて利潤を収めることは、不斷にその商品にたいする需要を増すことによつてのみ可能である。もし需要が増さない場合には、價格の水準は、それらの新企業にとつても、また獨占的諸結合にとつても引合ないまでに、引下げられる。『保護關稅がカルテルの形成を容易ならしめてゐる他の國家の場合とは異つて、イギリスにおけるカルテル、トラストの獨占利益の獲得は、一般に、競争する企業の數が極く少數に、普通には二十四五の個々の會社に減少した時に始めて、起つて來る。』『全然經濟的な領域において、集積運動が大産業の獨占組織の上に、どれだけ大きな影響を及ぼすかど、イギリスにおいて、透き徹るやうな純粹な形で現はれてゐる。』（註

五)

五十年前マルクスが「資本」^{ダス・カピタル}を書いた時、當時の國民經濟學者の大多數は、自由貿易を一つの「自然法」であると考へてゐた。御用科學は、マルクスの「資本」を黙殺しやうと努めた。といふのは、マルクスが、資本主義を、理論的、歴史的に解剖して、自由競争は生産の集積を生み出し、生産の集積はその發展の一定段階において獨占を招來するといふことを、論證したからである。今日、獨占は事實となつてゐる。國民經濟學者は山の如き書物を書き、その中で獨占に關する個々の現象を描き出し、それによつて異口同音に、「マルクス主義は論破された」と公言する。しかしながら、イギリスの諺にあるやうに、「事實は嚴として動かす可からざるものである。」そして善かれ悪かれそれを計算に入れねばならぬ。事實は次のことを示してゐる。保護貿易國であるか自由貿易國であるかといふ、個々の資本主義國家の差異は、獨占の形態又はその發生の時期に關して、重大ならざる差異を齎らすに過ぎず、生産の集積から來る獨占の成立は、然し一般に資本主義今日の發展段階の普遍的、基礎的法則を成すものであること、是である。

ヨーロッパにおいては、新らしい資本主義が古い資本主義を、決定的に解消す可き時期が、可

なり充分に熟してゐる。それは二十世紀の初頭においてである。獨占形成の歴史に關する最近の或る總括的な著述において、吾々は讀む。

「資本主義的獨占の個々の實例は、一八六〇年以前に、これを求めることが出来る。それらの實例のうちに、今日吾々が熟知する獨占形態への萌芽が認められる。しかしその凡ては全く歴史以前のものである。近代的獨占の實際に發生したのは、早くとも、六十年代においてである。その最初の大いなる發展期は、七十年代の國際的不景氣と共に高まり、九十年代の初めに達する。……ヨーロッパ全體として見れば、自由競争は六十年代及び七十年代において頂點に達した。當時イギリスは、古い様式の資本主義的組織の構成を完了した。ドイツにおいては、古い資本主義が、手工業及び家内工業を壓して、力強く前進し來り、それ自身の存在形態をつくり始めた。……大きな變化は、一八七三年の恐慌と共に、もつと正しく云へば、それに次いで來た不景氣と共に始まる。その不景氣は、八十年代の初めのほんの僅かな中斷と、一八八九年の異常に急激な、然し極く短期な「好景氣」を除いて、二十二年間のヨーロッパの經濟史を埋めたものである。……一八八九——九〇年の短期な好景氣時期において、市況を左右するため

に、カルテル秩序が強度に利用された。物價はいづれ騰貴したには相違ないが、不聰明な政策は、一層急激に、一層強く、物價を騰貴させた。そして殆んど凡てのそれらのカルテル團結は、その後、「恐慌の墓穴」に落ちてしまつた。その後五年間、更に激しい事業の不振と、物價の下落が続いたが、産業界を支配した空氣は、最早や以前と同一ではなかつた。世人はその不景氣を、來る可き新らたな市場の、好景氣の前の一つの休息であると考へた。

かくてカルテル運動は、その第二期に入つた。カルテルは最早や、一時の過渡的現象でなくなり、全經濟生活の基礎の一つとなつた。カルテルは一つの分野から他の分野へと征服して行くが、先づ第一に原料産業を征服する。既に九十年代の初めに、コークス・シンジケートが組織せられ、ついでそれに則つて石炭シンジケートが形成された。それは、今日においても、本質的に脱却し切れなない一つの結合技術である。十九世紀の終末の大好景氣及び一九〇〇——一九〇三年の恐慌は、少くとも鑛山業及び冶金工業においては、始めて全くカルテルの作用の下に起つたものである。而して當時まだ世人は、それを何等か新らたなものに見做してゐたが、これこれする中、自由競争といふ經濟生活の大部分は、規則的に取除かれつゝあるといふことが、

世人の常識に自明なこととなつてしまつた」(註六)

ドイツ發達史の基礎的段階は、従つて次の如くである。

一、一八六〇——一八七〇年。この時期は自由競争の發展における最高限界で、獨占は漸く發生したばかりである。

二、一八七三年の恐慌以後。この時期にカルテルは廣汎な發展を見たが、それはまだ例外であつて、判然としない、過渡的な現象の域を脱しなかつた。

三、十九世紀末の好景氣と一九〇〇——一九〇三年の恐慌期。この時期にカルテルは、全經濟生活の基礎の一つとなつた。そして、資本主義は帝國主義となつた。

カルテルは販賣條件、計算期日等を一定する。カルテルはまた相互の間に、販路を分割する。生産す可き商品の量を協定する。個々の企業家の間に、利潤等を割當てる。

カルテルの數はドイツにおいて、一八九六年に約二百五十、一九〇五年に三百八十を數へ、約一萬二千の工場を有してゐた。(註七)しかしこの數字が、實際より低く見積られてあることは、一般に認められてゐる。曩に掲げた一九〇七年の産業統計の示すところによれば、一萬二

千の大經營だけで、蒸汽力及び電力の半以上を使用してゐる。

北米合衆國では、一九〇〇年にイラストの數が百八十五、一九〇七年に二百五十を數へた。

アメリカの統計は、凡ての産業企業を、個人商會と、會社とに分類してゐる。會社に屬するものは、一九〇四年に二三・六%、一九〇九年に二五・九%、即ち、企業總數の四分の一以上であつた。それらの企業に雇傭されてゐる労働者は、一九〇四年に全労働者數の七〇・六%、一九〇九年に七五・六%（總數の四分の三）で、その生産高は、百九億弗（一九〇四年）、百六十三億弗、（一九〇九年）、即ち、總額の七三・七%、七九%に達した。

カルテル及びトラストは屢々、ある産業部門の全生産の七割乃至八割を、その手中に集積した。ライン・ウエストファリア石炭シンヂケートは、その創立年度の一八九三年に、同地域の全石炭産出高の八六・七%、一九一〇年に九五・四%を供給した。（註八）

かくの如き方法で發生する獨占は、大いなる利潤を保證し、大規模の生産技術の統一を形成する。アメリカの有名な石油トラスト（スタンダード石油會社）は一九〇〇年に創立された。その「資本は一億五千萬弗で、一億弗の普通株、一億六百萬弗の優先株が發行されて居り、それ

にたいして、一九〇〇——一九〇七年に、四八、四八、四五、四四、三六、四〇、四〇、四〇%の配當が行はれ、その總額三億六千七百萬弗である。一八八二年から一九〇七年の末までに、純利得八億八千九百萬弗のうちから、六百萬弗は配當され、殘額は準備金にまはされた。」(註九)

「一九〇七年、^{ユー、エヌ、エス、シー}米國鋼鐵會社(鋼鐵トラスト)の全工場に、二十一萬百八十人の使用人が働らいてゐた。……ドイツ鑛山業中の最大企業たるゲルゼンキルヘン鑛山會社は、一九〇八年に、四萬六千四十八人の使用人を雇つてゐた。」(註一〇)

既に一九〇二年に、鋼鐵トラストは、九百萬噸の鋼鐵を生産した。(註一一)その鋼鐵生産高は、一九〇一年に、合衆國の全鋼鐵生産高の、六六・三%、一九〇八年に、五六・一%に達した。(註一二)、その採鑛量は、同一年度において四三・三%、四六・三%であつた。

アメリカの官廳報告は煙草トラストに關して言つてゐる。

「競争者にたいするトラストの地位の優越は、その經營の規模の大と、その進歩した技術的準備とに基く。煙草トラストはその成立以來、一切の筋肉労働に代ふるに出來得る限り機械を

もつてする事に努力した。同トラストはその目的のために、煙草製造に何等かの關係ある凡ての特許を買収し、そのために巨額の金を支出した。多くの特許は、最初は、實用に適せず、まづトラスト附の技師がそれに改良を加へなければならなかつた。一九〇六年の終りに、單に特許の買収だけをその業務とする二つの姉妹會社が設立された。同じ目的のために、煙草トラストは自身の鑄造工場、幾械製造工場、修繕工場を設けた。ブルークリンに在るこの種の工場の一つは、平均三百人の労働者を使用し、そこでは、葉卷、紙卷、嗅煙草、錫紙、葉卷包、箱等の製造に關する諸の發明が試験され、必要な場合には、それに改良が加へられてゐる。(註

一三)

それ以外のトラストも亦、新らしい製造方法の案出、技術的改良をその職務とする、いはゆる改良技師デウエローピング・エンジニアを使用してゐる。鋼鐵トラストは、所屬の技師や労働者にたいし、多額の賞與金を懸けて、經營の技術的能力を高め、又は生産費を輕減する如き、新發明を獎勵してゐる。」

(註一四)

ドイツ大産業における技術的改良の採用もまた同様にして行はれてゐる。例へば近年非常な

發展を見てゐる化學工業におけるが如くである。化學工業における生産の集積は、既に一九〇八年に、二つの決定的「集團」を造り上げ、これらの集團は勝手に同じく獨占的特質を帯び初めた。最初この集團は、各二千萬馬克から二千百萬馬克の資本を持つ大事業の二組の「ドッペルフェルベンデ二重團結」であつた。即ち、一方は、ホックスター染料工場と、フランクフルト・アンマインの以前のマイスター・ルシウス・ブルニング・レオボルド・カッセルラ會社、他方は、ライン河畔ルドウイヒシャフンエのアニリン曹達會社と、エルバーフェルドの以前のフリードリヒ・バイエル會社である。更に前者は一九〇五年に、後者は一九〇八年に、各一個の大經營と條約を締結し、かくて各四千萬馬克から五千萬馬克の資本を持つ二つの「ドラインベンデ二重團結」が出来上り、(註一五)この團結の下に既に、價格その他に關する「協定」、「契約」が開始された。

*一九一六年六月新聞紙はドイツの化學工業生産を包括する新巨人的大トラストの設立を報じた。

競争は獨立に變化する。その結果、生産の尠大な社會化過程が生ずる。なかんづく、技術上の發見及び改良の過程が社會化される。

それは、互に相識らぬ、離れ離れの、未知の市場の販路のために生産する企業家の、古い自

由競争とは、全く別個のものである。集積運動は既に極めて廣汎な範圍で進行してゐる。されば、或る一つの國の、そして加ふるに、後に示すが如く數ヶ國の、否、全世界の（たとへば鐵鑛）の凡ての原料産地は、ほどこれを概算することが出来る。

而もかく概算することが出来るばかりでない、何となれば、尨大な獨占團體がそれらの産地を占有し、且つそれを一手に統轄してゐるからである。市場がほど豫め計算せられ、協定に基いてそれらの團體の間に「分割」される。熟練労働者は獨占せられ、最良の技師は雇入れられ、交通機關——アメリカの諸鐵道、アメリカ及びヨーロッパの諸汽船會社——は、占有されてしまふ。その帝國主義的段階において、資本主義は、生産の最も包括的な社會化にキチンと導いて來る。それは、或程度まで資本家を、彼等の意志に反して、且つ彼等が格別それを意識することなしに、一つの新たなる社會秩序の中へ引摺り込む。その新たなる社會秩序は、完全なる自由競争から完全なる社會化への過渡を示すものである。生産は社會化される。しかし乍ら、獲得は依然として私有的である。社會的生產手段は依然として、小數個人の私有財産である。形式的に認められた自由競争の普遍的制度は存置せられ、爾餘の民衆にたいする小數獨占者の

壓迫は、百倍も、慘酷に、峻烈に、堪え難いものになる。

ドイツ國民經濟學者ケストナー博士は、カルテルと外側者、即ちカルテルに屬さない企業家との間の鬭争に關する特殊的研究に携つた。彼は、その著作を「組織強制」と題してはるるが、しかし獨占團體の下における服従への強制について語らなければならなかつた。獨占の利用する、現在の、近代的な、文明的な「組織」の爲の鬭争手段の一覽表に、一瞥を投げただけでも、大いに教へられるところがある。

一、原料封鎖……（「カルテル強制の最重要な方法」の一つである）。

二、「同盟」^{アリアンツェン}による労働力の封鎖（即ち、労働者はカルテル化された企業においてのみ労働を許されるといふ資本家と労働者團體との間の協定）。

三、運輸の封鎖。

四、販路の封鎖。

五、排他的障壁による購買者の拘束（即ち、カルテルとのみ商業上の取引を行ふと云ふ購買者との協定）。

六、外側者を倒さんがための計画的價格引下。一時生産費以下に賣却するため、巨額の金が投げ出されることがある。(ベンヂン工業では屢々價格が、四〇馬克から、一二馬克、即ち殆んど半値に引下げられる！)。

七、信用の封鎖。

八、中傷。(註一六)

最早、小經營と大經營との競争、技術的に遅れた經營と技術的に進んだ經營との競争は問題とはならぬ。獨占と、その壓迫と、その暴壓とから脱しやうとする凡てのものは、獨占者によつて絞殺される。この過程は、ブルジョア經濟學者の意識に次の如く反映してゐる。

ケストナアは書いてゐる。「純粹の經濟的活動の内部にも以前の意味の商人的活動から、組織的投機的活動への推移が、入り込んで來る。最も大きな成功をおさめるものは、技術的商業的經驗に基いて顧客の需要を最もよく解し、潜在的な需要を發見し、實際にそれを喚び起すことの出來る商人ではなくて、組織的發展、個々の企業と銀行の間の提携の可能性を、豫測し又は豫感し得る投機的天才!」である。(註一七)

それを人間的な言葉に移せばかうなる。資本主義は非常な發展を遂げ、その結果、商品生産は以後も元通り「支配」して居り、全經濟の基礎としての効用があるが、實際においてはそれは既に搖り動かされ、主要利潤は金融活動の「天才」の手に歸してゐる。この活動と詐偽の基礎は生産の社會化に求むべきである。而して努力してこの社會化を齎らした人類の目覺しい進歩は、結局投機業者を利する結果になつてゐる。吾々は更に以下において、いかに資本主義的帝國主義の小ブルジョアの反動的批評が、「この基礎に立つて」、「自由な」、「平和的な」、「正直な」競争への復歸を夢みてゐるかを、點檢するであらう。

ケストナーは云ふ。「カルテル作用としての價格の繼續的引上は、今日までのところでは、重要な生産手段特に石炭、鐵、石灰においてのみ行はれて居て、精製品においては嘗て繼續的に行はれたことはない。それに關聯する利潤の引上もまた同様に、依然として生産財産業に局限されてゐる。そこで吾々はその觀察を次の點まで擴張しなければならぬ。即ち、原料産業が、これまでのカルテル構成によつて得たる收入と利益とは、嘗に精製品産業の利益を犠牲として得たるものである許りでなく、亦た、後者にたいして、自由競争の下では嘗て知られなかつた

やうな支配關係を獲得してゐるといふことである。(註一八)

この支配關係こそ、ブルジョア國民經濟學によつて、極めて嫌や嫌やながら稀れに認められ、カール・カウツキーを頭目とする今日の日和見主義の擁護者が無視しやうと熱心に試みてゐる物の實體である。その支配關係と、それと結び付けられた權力——それこそは「資本主義最近の發展」にとつて典型的なものであり、全能なる經濟的獨占から不可避的に生ぜざるを得ないもので、又實際に生じたものである。

カルテル經濟に關して、更に一つの實例を挙げやう。原料産地の凡て又はその最重要なものを手に入れることが出来る處では、獨占の成立と形成とは特に容易に行はれる。しかし、原料産地を占有することが不可能である他の産業部門において、獨占が発生しないと考へるのは、誤りである、セメント工業の原料はどこにでもある。しかしこの工業も亦ドイツでは、カルテル化されてゐる。その諸工場は、たとへば南ドイツ・シンヂケート、ライン・ウエストファリア・シンヂケート等の如く、地方的シンヂケートを結んで居り、生産價格百八十馬克のセメント一輛にたいして、二百三十馬克から二百八十馬克の獨占價格を設定されてゐる。その企業は一二

%から一六%の配當をしてゐるが、この利益配當以外に、近代的投機の「天才」達が、莫大な金を自身のポケットへねぢ込むことを知つてゐるといふ事實を忘れてはならぬ。その上獨占者は、かやうな利益ある競争を除くために、有りと有らゆる詐計をすら利用する。セメント工業の地位危しとの虚報が傳へられ、「資本家諸君はセメント工場の新發起に參與することを嚴に戒めよ」との匿名の報道が新聞紙に現はれるなどがそれである。それで結局は「外側者」(即ち、シンヂケートに屬さない人々)の諸工場が買収され、六萬——八萬——十五萬馬克の賠償金が彼等に支拂はられる。(註一九)獨占は到る處において、且つ、「穏和な」賠償金支拂から始めて、競争者にたいするアメリカ式の爆弾的「威嚇」にいたるまでの、あらゆる方法を用ひて、その進路を展いて行く。

カルテルは恐慌を除去すると云はれてゐるが、それはいかなる代價を拂つても資本主義を辯護しやうとするブルジョア國民經濟學者の、お伽噺である。反對に、二三の産業部門に發生する獨占は、全體としての資本主義生産に固有なる混沌状態を、増大し、激化する。資本主義一般にとつて特徴的であるところの、農業の發展と工業の發展との不均衡は、大きくなるばかり

である。「ドイツ大銀行の産業に對する關係」についての立派な著作の一つの著者たるヤイデルスが認めてゐるが如く、大部分カルテル化された、所謂重工業、特に石炭業及び鐵工業の占める特權的地位は、爾餘の産業部門に、「昂進された無計畫」を導いて來る。(註二〇)

資本主義の無條件擁護者リーフマンは述べてゐる。「國民經濟が發展すればするほど、益々それは冒險的な、又は、對外的な企業に變化する。それは發展に極めて長い時を要するか、若くは、たゞ地方的意義しか持たぬ如き企業である。」(註二一)

その危険の増大は、結局、ゆはゆる國境を越えて外國に流れ出る資本が、驚く可く増加すると云ふ事實と結びいてゐる。而して同時に、急激に發達する技術は、國民經濟の個々の部分間の不均衡の要素をますます多く生み出し、混沌と危機を増大する。そのリーフマンさへ次のやうに告白しないわけに行かない。

「必らず、遠からぬ未來に於て、もう一度、技術的方面における大きな變革が、人類に迫つて來る。その變革は、國民經濟の組織の上にも、影響を及ぼすであらう……。」「(電力、空中飛行。」「そう云ふ、基礎的な經濟的變革の時代には、概して、激しい投機的發展を見るのを常と

する。」(註二二)

しかし危機——各種の最も多く経済的性質を帯びた、だが、單にこれだけではないところの——は、驚く可き範圍にわたつて、集積及び獨占への傾向を強める。一九〇〇年の危機の意義に關して、ヤイデルスは次の如き非常に教訓に富んだ觀察を下してゐる。その危機は、周知の如く、近代獨占發達史において、一轉期を意味するものであつた。

「一九〇〇年の危機は、基礎的工業の巨人的經營と相竝んで、今日の觀念からすれば舊式な多くの經營、即ち、市場の好況の波に乗じた「純粹」企業を發生せしめた。價格の下落、需要の減退は、それらの「純粹」企業を窮地に陥れたが、聯合態巨人的大經營にあつては、一部は全く安全であつたし、一部に困窮したがそれも極く短い期間であつた。それによつて、最近の危機は、一八七三年のそれとは比較にならぬ高い度合に、産業の集積を促進した。一八七三年の危機は、企業の淘汰を行つたには相違ないが、當時の技術的發達の程度から、首尾よく成功した企業の獨占が形成されるほどの淘汰は行はれなかつた。今日、その複雑した技術と、大規模な組織と、資本の強さをもつて、永續的な獨占を形成してゐるものは、鐵工業及び電氣業

の大經營であつて、それにつぐものは、機械工業、或種の金屬工業、交通業及びその他の産業である。」(註二三)

獨占はまことに、「資本主義の最新の發達」の結語である。しかも、銀行の演ずる役目を等閑に附するならば、近代的獨占の實際的權力及び意義に關する吾々の説明は、極めて不充分且つ不完全なものとなるであらう。

二 銀行の新役割

銀行の基本的、本源的な活動は、支拂仲介である。それに關聯して、銀行は、休閒的貨幣資本を、機能的即ち利潤を生む資本に轉化し、凡ての貨幣收得を蒐集して、資本家の處理に委せる。

銀行制度とその集中が少數の設備に發展する度合に應じて、銀行は、穩和な仲介者から、凡ての資本家及び小企業家の殆どすべての貨幣資本、並に或一國又は數ヶ國の生産手段及び原料産地の大部分をも左右するところの、強力な獨占主に轉化する。多數の小仲介者から極く少數の獨占把持者へのこの變化は、資本主義から資本主義的帝國主義への變化の基礎的過程の一つを形成する。されば吾々は先づ、銀行の集中について研究しなければならぬ。

一九〇七—八年において、百萬馬克以上の資本を持つてゐたドイツの全株式信用銀行の預金は、七十億馬克に達し、それが一九一二年から一九一三年に、既に九十八億となつた。五ヶ年

間に四〇%の増加であるが、その増加額二十八億のうち二十七億五千萬までは、一千万馬克以上の資本を持つてゐる五十七個の銀行における増加額であつた。大銀行と小銀行の間における預金の配分は次に示す通りであつた。(註二四)

全預金の百分率

	九個のベルリン 大銀行 %	一千万以上の資本 を有つその他の四 十八個の銀行 %	百萬から一千万ま での資本を有つ百 十五個の銀行 %	小銀行(百萬以下の 資本を有する) %
一九〇七—八	四七	三二・五	一六・五	四
一九一三—一三	四九	三六・〇	一二・〇	三

小銀行は大銀行のために追ひ退けられ、大銀行のうち九個のベルリン銀行だけが、全預金の殆んど半分を集積してゐる。しかしこの場合、たとへば小銀行の全系列が大銀行の事実上の支店に變化すると云ふごときことは、まだこれを問題としない、それについては後で説く。

シュルツェゲ・ヴァーニツは、一九一三年末における九個のベルリン大銀行の預金を、約百億馬克の總額のうち、五十一億馬克と見積つた。預金ばかりでなく、全銀行資本も考慮に入れて、同じ著者はかう書いてゐる。

「九個のベルリン大銀行は、それに結合してゐる諸銀行と共に、一九〇九年の終りに、百十二億七千六百萬馬克（一九〇八年の終りには、百五億八千七百萬馬克であつたが）、即ち、全ドイツの銀行資本の八三%を管理してゐた。その合同諸銀行と共に、三十億馬克を管理してゐる「ドイツチェ・バンク」は、プロシア鐵道省とならんで、「舊世界の最大の——同時に、最高の地方分權的の——資本綜合である。」（註二五）

吾々が、こゝに特に「結合」銀行を指摘したのは、それが、近代的資本主義的集積の最重要な特徴の一つだからである。大經營特に大銀行は、小經營を貪り盡してしまふばかりでなく、それらを自己に「結合」し、それらを征服し、それらの資本への「參與」、株の買収又は交換によつて、また負債關係の組織等によつて、それらを「自己」の集團に、自己の合同（専門的の表現にグルツペ）したがへば）に包擁する。リーフマン教授は、近代の「企業參與會社及び金融會社」を説

明するため、約五百頁に亘る大「著述」に携つてゐるが、彼は不幸にも、正しいその著の材料にたいして、餘り價值のない「理論的」考察を附け加へてゐる。右の「企業參與」の組織が、どの程度まで集積を齎らすかは、ドイツの大銀行に關する専門の銀行研究家リーセルの著書が、最もよく説明してゐる。然し彼の材料を點檢するまへに、吾々は先づ、企業參與組織の實例を示さうと思ふ。

ドイツチ・バンクの「集團」は、ドイツの最大の銀行團ではないにせよ、最大の銀行團の一つである。凡ての銀行を正にこの集團に結びつける重要な絲筋を知るためには、諸「參與」を第一、第二、第三の程度のそれに、又は同じことであるが、隸屬（ドイツチ・バンクにたいするヨリ小なる銀行の）を、第一、第二、第三の程度のそれに、分類しなければならぬ。すると、次の表が得られる。（註二六）

ドイツチエ・バンクは

	第一の程度の隷屬	第二の程度の隷屬	第三の程度の隷屬
永續的に	一七銀行に參與し	その中九銀行は三四銀行に	その中四銀行は七銀行に參與する
期限を定 めずに	五銀行に參與する	………	………
利益に應 じて	八銀行に參與し	その中五銀行は一四銀行に	その中二銀行は二銀行に參與する
總計	三〇銀行に參與し	その中一四銀行は四八銀行に	その中六銀行は九銀行に參與する

「第一の程度の隷屬」の八個の銀行のうち、三個の外國銀行がある。オーストリーの銀行一個（ウイenna銀行同盟）、ロシアの銀行二個（シベリア商業銀行、ロシア外國貿易銀行）が、それである。全部で八十七個の銀行が、直接又は間接、全部的又は部分的に、ドイツチエ・バンクの集團に参加して居り、その合同の支配する自國および外國の資本の總額は、二十億から三十億馬克に達してゐる。

かゝる集團の先頭に立つて居り、且つ、例へば公債引受の如き大規模な有利な金融活動のため、他の五六のヨリ從屬的でない銀行と協定を結ぶ大銀行が、既に單なる「仲介」を越えて、極く少數の獨占主の團結に變化したことは、明かである。

十九世紀及び二十世紀初頭において、ドイツにおける銀行の集中がいかなる速度をもつて進行したかは、次の簡約に翻譯するリーセルの材料によつて、示されてゐる。

六個のベルリン大銀行の勢力

年 度	ドイツ帝國に於ける支店	ドイツ帝國に於ける預金所及び爲替所	ドイツ株式銀行への永續的參與	諸般の施設の總數
一八九五	一六	一四	一	四二
一九〇〇	二一	四〇	八	八〇
一九一一	一〇四	二七六	六三	四五〇

全國を蔽ひ、全資本及び貨幣收得を集中し、無數の分散せる經濟を、一つの全國的資本主義

經濟に、結局一つの國際的資本主義經濟に、變化させるところの、細かい網の目の如き運河が、いかに速かに出来るかは、それで分る。さきに引用した文章のうちで、シュルツェ・ケヴァーニツがブルジョア國民經濟學の代表者として説述してゐるところの、かの「地方分權」なるものは、事實においては、以前には比較的「獨立」してゐた、若しくはモット正しく云へば地方に限られてゐた經濟單位のますます大いなる部分が、單一の中心の下に降服することに外ならぬ。かくの如く、實際においては、——巨大な獨占の役割、意義、權力の集中、増大である。

古き資本主義國家では、この銀行網は一層緊密である。一九一〇年、イングラント（アイルランドも含めて）において、銀行支店の總數は七千百五十一個に達した。四個の大銀行は、各々四百以上（四百四十七から六百八十九）の支店を持ち、その支店のうち四個の銀行は更に二百以上、十一個の銀行は百以上の支局を持つてゐた。

フランスに於いては、クレヂ・リオネ、コントアール・ナシヨナル・デスコント・ド・パリ及びソシエテ・ゼネラルの三個の大銀行は、その活動とその支店を次のやうにして發展せしめた。

	地方支店	パリに及び管轄地域に於ける預金所	計	固有資金の貸借關係 (單位百萬法)	外來資金 (單位百萬法)
一八七〇	四七	一七	六四	二〇〇〇 (一八七三年)	四二七
一八九〇	一九二	六六	二五八	二六五	一二四五
一九〇九	一〇三三	一九六	一二二九	八八七	四三六三

リーセルは、近代的大銀行の有する「結合」の特質を示すために、ドイツ並に全世界の最大銀行の一たる「ディスコント・ゲゼルシャフト」(その資本は一九一四年に三億馬克に達した。)の手形の受附數及び發行數を舉示してゐる。(註二八)

受附數

發行數

一八五二	六、一三五	六、二九二
一八七〇	八五、八〇〇	八七、五一三
一九〇〇	五三三、一〇二	六二六、〇四三

パリの大銀行クレヂ・リオネでは、計算書の總數が、一八七五年に二萬八千五百三十五通であつたのが、一九一二年には六十三萬三千五百三十九通に増加した。(註二九)

この單なる數字は、管々しい考察よりは一層明瞭に、銀行の意義が、資本の集積及び銀行の取引の増加と共に、いかに根本から變化するかを示してゐる。分散した個々の資本家から、單一の集合資本家が生れる。銀行は、一定の資本家達のために交互勘定を爲す間に、或程度において、明かに純技術的な、排他的な補助的活動として評價される機能を果す。しかしこの補助的活動が、極めて廣い範圍にひろがるや否や、少數の獨占主が、全資本家社會の商業並に工業的活動を征服することは明白である。何となればその補助的活動が擴大する間に、その獨占主は、——銀行團結、交互勘定及びその他の金融活動を通じて——先づ個々の資本家の事業内容を、知悉し、次いでそれらを統制し、信用の擴大又は縮小、輕減又は重加を通じて、それらを牽制し、結局それらの運命を剩すところなく左右し、その利益を決定しその資本を取上げ、又は急激に大袈裟にその資本を増加させる等のことが出來るからである。

吾々はたつた今、ベルリンのディスコント・ゲゼルシャフトが、三億馬克の資本を有つてゐる

ると述べた。同銀行のこの資本の増加は、ベルリンの二個の最大銀行すなはちドイツ・チェンクとデイスコント・ゲゼルシャフトとの間の、覇権の争ひのうちに現はれた特殊な一挿話である。

一八七〇年に、ドイツ・チェンクはまだ一個の新参者で、総額千五百萬馬克しか持つてゐなかつたが、デイスコント・ゲゼルシャフトは三千萬馬克の資本を持つてゐた。ところが一九〇八年、前者の資本は二億馬克となり、後者は——一億七千萬馬克となつた。一九一四、ドイツ・チェンクはその資本を二億五千萬馬克に増加し、デイスコント・ゲゼルシャフトは、一流の大銀行たるアー・シャフハウゼン・バシクフェラインと合同フューションすることによつて、その資本を三億馬克に増大した。而して勿論、兩銀行は一方に、この覇権ヘゲモニーの争ひを演ずるとともに、他方において兩銀行間の「協定」は、いよいよ益々頻繁に且つ強固になつて行つた。節制ある、且つ秩序を愛する改良主義の埒を一步も出ない觀察點から、諸の經濟問題を考察する銀行専門家等すら、この發展過程によつて次の結論を強いられる。

デイスコント・ゲゼルシャフトがその資本は三億馬克に増大した時に、それに因んでランスブ

ルグは雑誌「銀行」に書いた。「更に他の銀行もその道を踏んで行くであらう……今日ドイツを
経済的に支配してゐる者は、三百人の人間であるが、時の経つにしたがつて、それが五十人、
二十五人、若くは更にそれ以下となつてしまふであらう。ところでこの最近の集積運動を、銀行
に限られるものと期待してはならない。個々の銀行に則られるものと期待してはならない。個
々の銀行の間の密接な關係は、自然に、彼等に保護される産業的合間の、接近をも招致する。
……而して或日床を起き出でて、眼を擦つて眺めると、吾々の傍には純粹のトラストラシがなく、
吾々の前には國家的獨占によつて個人的獨占が取つて代られる必然性を見るであらう、しかし
ながら、事態の發展に、その自然な、株式によつて若干促進された進行を許したと云ふこと
以外には、根底において何等吾々に非難さる可き點はないのである。」(註三〇)

これはブルジョア雑誌記事の貧弱なることを示す標本的實例である。ブルジョア科學も、一層
不正直であることゝ、事業の本體を塗りつぶし、樹の前に立つて森を見ざらしめる底の努力を
することだけが、それと異つてゐるに過ぎぬ。ドイツのカルテルが「トラストラ」のやうに技術的
進歩を促さない。(註三一)といふ無意味な理由で、アメリカのトラストラを怖れ、そしてドイツ

のカルテルを「探る」ドイツのカルテル専門家チエルシュキーの如く、集積の結果に「眼を擦つ」たり、資本主義「社會」(「吾々」)又は資本主義ドイツの政府を非難したり、株式募集の結果集積の「促進」されることに戦慄したり、——かゝることが何の役に立つか？

しかし事實は依然として事實である。トラストなどはなく、カルテルがあるドイツは、それにも拘らず、高々三百人の金融王に支配されて居り、その大諸侯の数は減少するばかりである。凡ての場合凡ての資本主義國家において、銀行法制がいかなる形態であらうとも、資本集積と、獨占形成の過程は、銀行を通じて、強固にされ、促進される。

五十年前マルクスは、その著「資本」のうちに、銀行に依つて「生産手段の一般的簿記と分配との形態は、社會的階梯に於いて與へられてゐる、だがたゞ形態だけである。」と書いた。(「資本」第三卷第二編一四六頁) 銀行資本の發達、大銀行の支店及び預金所數の増加、その正金數等コンテンに関する既掲の資料は、資本家の全階級の「一般的簿記」を具體的に示した。が、それは獨り資本家のそればかりではない。何となれば、銀行は、小企業家ならびに官吏、労働者の少數上層の一切の可能な貨幣收得を——たとへ一時的にせよ——その手に搔き集めるからである。形式的に

觀察すれば、フランスでは三個から六個、ドイツでは六個から八個の、幾十億の巨額の金を左
右する力をもつてゐる近代的銀行から「生産手段の一般的分配」が生長する。しかしその内容か
らすれば、この生産手段の分配は、決して「一般的」でなく、個人的である。即ち、大資本、そ
してとりわけ最大の獨占的資本の利益に應ずるものである。而してこの獨占的大資本は、民衆
の大多數が飢えて生活して居り、農業の全發展が工業より遙かに遅れて居り、工業そのもの、
内部においては、「重工業」が凡ての他の部門を犠牲としてゐるといふ關係の下において、實現
するものである。

資本主義經濟の社會化過程において、貯蓄銀行及び郵便局と、銀行との競争が始まる。とい
ふのは、貯蓄銀行及郵便局は、銀行に較べてより多く「地方分權的」だからである。即ち、益々
多くの領域、益々遠隔の地點、益々廣範なる民衆の層に浸入してゐるからである。銀行及び貯
蓄銀行における貯蓄の相對的增加問題に關して、アメリカの調査委員會の蒐集した比較資料を
次に掲げる。(註三二)

貯金額 (單位十億馬克)

	イギリス		フランス		ドイツ		
	銀行預金	貯蓄銀行 貨幣	銀行預金	貯蓄銀行 貨幣	銀行預金	信用産業 組合預金	預金銀行 貨幣
	一八八〇	八・五	一	一・〇	〇・五	〇・四	二・六
	一八八八	一二・五	一・五	二・二	一・一	〇・四	四・五
	一九〇八	二三・二	三・七	四・二	七・一 (一九〇七)	二・二 (一九〇六―七)	一三・九 (一九〇七)

貯蓄銀行は、四乃至四・二五%の利子を支拂ふのであるから、その資本を「利益あるやうに投下」しなければならず、爲替業、抵當貸附及びその他の活動をしなければならぬ。普通銀行と貯蓄銀行の區別は、消滅するばかりである。ボヒウム及びエルフルトの兩商業會議所は、たとへば、貯蓄銀行に手形割引の如き純銀行的活動をなすことを「禁止」し、郵更局員の「銀行的勤務」を制限せんことを、要求してゐる。(註三三) 銀行王等は、國家的獨占が全く豫期しない方面から、彼等を襲つて來はしないかと、惧れてゐるものゝ如くである。しかしその不安は、勿

論、同一局における二人の課長の競争の埒を越えることは出来ない。何となれば、一方において、貯蓄銀行の數十億の貯金は、結局、その銀行資本の大諸侯の手に握られることとなり、他方資本主義社會における國家獨占は明かに、或る産業部門における破産に瀕した大金持の利得を高め且つ保證する手段を意味するからである。

獨占の支配する新らしい資本主義による、自由競争の支配する舊い資本主義の解消は、また、取引所の衰微となつて現はれる。

離誌「銀行」は言ふ。「銀行が株の大部分を顧客に賣渡すことが出来なかつた時代は、取引所は缺く可からざる取引仲介者であつたが、もうよほど前から、そうでなくなつて仕舞つた。」（註三四）

「『個々の銀行は一個の取引所である』といふ言葉は、銀行が大きくなればなるほど、銀行業の集積が進行すればするほど、ますます眞實となる格言である。（註三五）

「嘗て七十年代において、若い放蕩的な取引所（一八七三年の取引所恐慌、發起人醜聞等にたいする『立派な』諷刺）が、株式の賭博を利用しながら、ドイツの産業化を導いたとすれば、

今日、銀行と産業は、『獨りで騎行する』ことが出来る。今日の銀行の取引所支配は……ドイツの産業が完全に組織されたことを表はすものに外ならぬ。それと共に、經濟法則が自働的に作用する領域は切斷せられ、銀行による意識的統制の領域は非常に擴大せられ、それと共に、極く少數の指導者の國民經濟上の責任が、度外れに増大する。(註三六)

ドイツ帝國主義の辯護者で、凡ての國家の帝國主義者にとつて一權威たる、ドイツのシュルツェ・ゲヴァーニツ教授は、そう言つてゐる。彼は實に、銀行によるこの「意識的統制」は、極少數の完全に組織された獨占者が民衆の血を絞ることによつて、存在してゐるものであるといふ、「一瑣事」を塗抹しやうとしてゐる人である。このブルジョア大學教授の任務は、その全機構を暴露し、銀行獨占者の活動を顯示することにあるのでなく、寧ろそれを隱蔽することに在る。

さらに權威ある銀行専門家であり、國民經濟學者である、リーセルもまた同様である。彼は否定す可からざる事實を、一對の空虚な句で片付けてしまつてゐる。

「その」ことから、またかういふことが生ずる。取引所は、立派な取引機關であるばかりでなく、それへ流れ込んで來る經濟的運動のほとんど自働的な統制者であるといふ、全經濟及び有價證

券市場にとつて缺く可からざる特質を、ますます失ひつゝある……」(註三七)

言葉を換へて言へば、自由競争の古き資本主義は、無條件的に必要な統制者としての取引所と共に、消滅する。古い資本主義は、自由競争と獨占の混合といふ、過渡的現象の凡ての特徴が附着してゐるところの、新しい資本主義によつて剝ぎ取られる。それで自然、問題はかうなる。然らばこの最新の資本主義は何處に向つて「進む」か？ だが、ブルジョア學者は、この問題提起の前に尻込みする。

「三十年前には、三人の競争する企業家は、手工上の熟練として『労働者』に歸さない種類の經濟的労働の、十分の九を自ら行つた。今日では、事務員が、その經濟的頭腦労働の十分の九を行ふ。銀行業は、この發展の先頭に立つものである。」(註三八)

シュルツェ・ゲヴァーニツのこの告白は、結局するところ常に、次の問題に歸つて來る。最新資本主義、即ち帝國主義的段階に達した資本主義は、何處へ向つて進むであらうか？ 是である。

集積過程の結果として全資本主義經濟の頂上に立つてゐる少數の銀行の下にあつては、自然、

相互の間に獨占協定を結び、銀行トラス、トを形成せんとする努力がますます強烈になつて行く。アメリカでは、九個の銀行ではなくて、百十億馬克の資本を擁する、百萬長者ロックフェラーとモルガンの二個の最大銀行が支配してゐる。(註三九) ドイツでは、取引關係者の機關紙「フランクフルテル・ツァイツング」は、曩に述べたディスコント・ゲゼルシャフトによるシャーフハウゼン・バンクフェラインの合同に、次の註釋を加へてゐる。

「集積運動の進行するに伴つて、巨額の信用を要請し得る範圍は、常に縮少し、その結果、若干の銀行合同にたいする大産業の隸屬が増大する。産業と金融の内部的連絡のために、銀行資本に依存する産業會社の活動の自由は、制限される。されば大産業は、銀行のトラスト化の増大を、困惑の情をもつて見送る。しかし既に、競争の制限を目的として、個々の大合同間に、一定の協定の成立を告ぐる諸の萌芽が現はれてゐる。」(註四〇)

銀行發展の最後の言葉は、常に、獨占である。

銀行と産業の密接な關係に就いては、銀行の新らしい役割が、極めて明瞭にこゝに現はれる。銀行が、一定の企業家等の爲替を割引き、彼等に交互勘定の便を與へる、等のことをしたとこ

るで、その活動は、個別的に見れば、毫末もその企業家の獨立を殺ぐものでなく、銀行は依然として、決然たる仲介者の役目の中に止まる。しかしながらこの活動が屢々繰返され、固定するや否や、銀行がどれい額の資本をその手に「堆積する」や否や、一の企業家の交互勘定の指導が、銀行をその地位に——それは實際に起つてゐることである——即ち、彼等企業家の經濟的地位をますます十分に完全に知り得る地位に置くや否や、その結果として、銀行にたいする産業の、常に完成されて行く隸屬が生ずる。

同時に、大商工企業と銀行との、謂ゆる人爲的結合が生れて來る。株の所有とか、商工企業の重役會議（又は管理）へ銀行の取締役が入り込むとか、又はその逆の遣り方で、兩者の融合が生ずるのである。ドイツ經濟學者ヤイデルスは、資本及び企業のこの種の集積について、十分な資料を蒐集した。六個のベルリン最大銀行は、三百四十四の産業會社に取締役を送り更に四百七の産業會社に重役を持ち、かくて全部で七百五十一の會社に代表者を出してゐた。またそれらの大銀行は、二百八十九の會社において、各二名の監査役會議の議員か又はその議長の椅子を持つてゐた（註四一）。その商工會社には、保險會社、運輸會社、料理店會社、劇場會社、工

藝會社等各種各様の産業部門が含まれてゐる。しかしまたこの六個の大銀行の監査役會議には（一九一〇年）五十一の大産業會社が代表者を出して居り、それにはクルップの一取締役。ハー・アー・ペー・アー・ゲー（ハンブルグ・アメリカ汽船會社）のそれ等、等があつた。この六大銀行は何れも、一八九五年から一九一〇年までに、數百の産業會社のために、株式及び社債の發行に參與した。その會社の數は實に、二百八十一（一八九五年）から四百十九（一九一〇年）に及んでゐる。

銀行と産業との「人的結合」はまた、彼此の會社と政府との「人的結合」によつて、補はれる。ヤイデルスは書いてゐる。

「重役の地位が、思ふまゝに、名聲高い人物や、以前の高官に提供される。彼は、諸の官廳との交渉において、多くの便宜（！）をつくることが出来るからである……」（註四二）

吾々は、大銀行の重役會議に、常に「一人の國會議員又は一人のベルリン市會議員」を見る。資本主義的大獨占の發生と發達とは、かくの如く、「自然的」及び「超自然的」の道をとつて、全速力で進行する。而して、近代資本主義社會の二百人の財政王の間に、組織的に一定の分業が

形成される。

「個々の大産業家の活動範囲のこの擴大（銀行の取締役に任命される等によつて）と、地方の取締役の活動を一定の産業區域に制限する事とは、益々大銀行の指導者をして特殊の營業部門における専門家たらしめる。それは、全銀行活動及び特に産業的聯絡の範圍が大きくなつて始めて、考へ得られることである。この分業は二重の方向をとつて行はれる。即ち、全體としての或産業との交渉が、取締役中の一人に特殊受持範圍として割當てられること、それと並んで、各取締役が、その重役會議の一員として個々の獨立した、又は事業と利益との性質を同じくした諸の企業を監督すること、この二つの方向である。國內産業時としては西ドイツの産業だけが、一人の取締役の受持となり、諸國家及び外國産業にたいする關係、人事關係、取引所事務等が他の取締役の専門となる。その上、取締役の各人に、一つの地方又は特殊の産業部門が割當てられることがある。一人は一時的に電氣會社の重役會議に加はり、他の一人は化學工業會社、釀造會社又は製糖會社のそれに参加し、更に他の者は、孤立せる産業企業を管理すると同時に、保險會社のやうな非産業會社の重役會議の一員となる……確かに、大銀行において、營

業の範圍と方面が増大すればするほど、その指導者間の分業が發展し、その結果、彼等は或る程度において、純粹の銀行的活動からぬけ出し、産業の普遍的問題ならびに個々の事業の特殊問題に對して、評價及び理解の能力を持ち、それによつて、銀行の産業勢力圏内に、積極的に活動する能力を持つやうになる。銀行のこの組織は、産業に通曉する人物を、それ自身の重役に推舉することや、又は、産業家、前役員、即ち鐵道及び鑛山のそれの如きを、娘銀行の重役に取り込んで來ることによつて、補はれる」等。(註四四)

フランスの銀行においても、若干稍々變つた形態ではあるが、同様な施設が見られる。フランス三大銀行の一たるクレヂ・リオンネは、例へば、一つの特別な「金融セルヴァイス・ド・セトウデ・フェイスンシノエール調査局」を設けた。そこでは常に、技師、統計家、經濟學者、法律家等、五十人以上の人間が働いてゐる。その年經費は六〇七十萬法で、八つの課に分れ、第一の課は産業企業に関する特殊の報告を蒐集し、第二の課は一般的統計を調査し、第三の課は鐵道會社及び汽船會社を研究し、第四の課は公債を、第五の課は金融報告を研究する等である。(註四五)

その結果として一方では、銀行資本と産業資本との融合、エヌ・ジュー・ブハリンの適切な表

現にしたがへば、合生がますます盛んになり、他方では、銀行が、益々眞に「普遍的性質」をもつた施設に生長する。この問題については、この方面を徹底的に研究したヤイデルスの正確な説明を引用することが必要であると吾々は考へる。

「産業的關係を、その全體において觀察すれば、産業の爲に活動する金融機關の、普遍的性質が目について來る。銀行は脚下の大地を忘却しないために、一定の領域又は事業に専門的に従事しなければならぬといふことは、往々經濟文献に述べられてゐる要望であるが、それに反して、又他の銀行形態に反して、……大銀行は、産業企業との團結を、地方及び事業の性質に隨つて、出來得る限り多面的にし、個々の銀行の歴史に示されてゐる如き、地域的、事業的配分の不釣合を、極力取除かんと努力してゐる。……産業との團結を普遍的にしやうとするのが、一つの傾向であり、その團結を永續的に強度にしやうとするのが、他の一つの傾向である。この二つの傾向は、既に六大銀行において、全く同じ度合ではないが、實際において同じ度合に、立派に實現されてゐる。」(註四六)

商工界から屢々銀行の「恐怖主義」^{テロリズム}に關する不満が起つて來る。次の實例の示すやうに銀行

がそれほどまで「號令する」場合に、さうした不満の聲の高く發せられるのは、決して不思議ではない。一九〇一年十一月九日、ベルリンのいはゆるD銀行（Dの頭文字で始まつてゐる四個のベルリン最大銀行）は、北西中ドイツ・セメント・シンヂケートの重役會議に宛てゝ、次のやうな書簡を送つた。

「去月十八日の官報に發表された貴會社の廣告によつて見れば、本月三十日に開催される貴會社の總會において、貴會社の營業上面白からぬ種類の變改を齎らす決議が爲される可能性がある」と認めねばならぬ。この理由によつて本銀行は甚だ遺憾ながら、從來會社に與へてゐた信用を、こゝに撤回しなければならぬ。……しかしながら、同總會に於いて、吾人が面白からずとする事項が決議されず、且つこれに關して、將來までも適當な保證が附されるならば、本銀行は喜んで、貴會社に新らしい信用を與へるために、協定を結ぶものであることを聲明する。（註四七）

畢竟するにそれは、大資本の壓迫にたいする小資本の不平であるが、たゞこの場合では、一つの全シンヂケートが「小資本」の範疇には入つてゐる！ だけである。小資本間の古き鬭争は、新らたな、測り知らぬ高い發展階段において、繰返される。誰でも分るやうに、大銀行の

大資本企業家は、以前のそれとは比べものにならぬやうな手段で、技術的進歩を促進することが出来る。銀行は例へば特殊の技術研究團體を作る。その研究の成果は、勿論、「友誼的」産業企業家だけを益する。「急行電鐵研究會」、「中央科學技術中央局」などが、それである。

大銀行の指導者自身、國民經濟に於いて新關係が発生してゐることを認めないわけに行かないが、然し彼等はそれを如何ともすることは出来ない。

ヤイデルスは言ふ。「近年における大銀行の取締役及び重役會議の人物の交替を観察した者は誰でも、次のことを認めねばならなかつた。産業の全發展に積極的な干渉を行ふことをもつて、大銀行の必須な、益々積極的になりつゝある業務であるとする人々が、いかに徐々に大銀行の舵手となつて來たか、この新手の舵手と古き重役との間に、そのことからいかに一個の實際的な、屢々個人的な對立が持ち上つてゐるかと云ふこと、是である。詰り古き重役の問題とするところは、銀行が産業の生産過程を蠶食して行く結果、信用設備としての銀行の業勢が損はれはしないかどうか、信用仲介とは何の關係もない活動のために、産業的變動の支配を是迄よりは一層強く受ける如き地位に銀行を押しやる惧れのある活動のために、銀行本來の堅固な原則及

び確實な利得が犠牲にされはしないかどうか、と云ふことである。古い銀行指導者の多くはその疑惧を抱いてゐるが、若い指導者の大多數は、産業問題における積極的干渉は、近代大産業の發展につれて大銀行を生み、大銀行の今日の産業關係業務を生んだと同一の必然性に基くものだ、としてゐる。たゞ兩者共に認めてゐることは、大銀行のこの新しい活動には、まだ確固たる原則も、具體的な目的もないと云ふことである。(註四八)

古き資本主義は終つた。新しき資本主義は、一つの過渡に過ぎぬ。獨占と自由競争を「調和」させるために、「確固たる原則と具體的な目的」を見出すことは、勿論出來ない相談である。

シエルツェ・ケヴァーニツ、リーフマン及び同類の「理論家」の如き、資本主義の擁護者共の、「組織された」資本主義の美にたいする公然の詔諛と、實際家の告白とは、全く異つてゐる。

大銀行のこの「新らしい活動」の決定的確立は何時であるか？ この重大な問題について、ヤイデルスは、かなり満足す可き答を與へてゐる。

「産業と、その新對象、新形態、新機關即ち、集中的であると同時に分散的に組織された大銀行との聯結は、九十年代以前にはまだ、特徴的の國民經濟的現象ではなかつた。ある意味に

おいては、その出發點を一八九七年とすることが出来る。それは産業と銀行の大合同が成つた年で、その合同は始めて産業的銀行政策の基礎から、地方分權的組織といふ新形態を造り上げたのである。若くはその出發點をもつと遅れた時期とすることも出来る。といふのは、産業並に銀行における集積過程を強く促進し、確立し、産業との交渉を始めて正しく、大銀行の獨占となし、その交渉を個々に著しく密接に、強度にしたのは、一九〇〇年の恐慌だからである。」

(註四九)

かくの如く、二十世紀初頭は、古き資本主義から新しい資本主義への、單純なる資本の支配から金融資本の支配への、轉回期である。

三 金融資本と金融寡頭政治

ヒルファードディングは云ふ。「産業の資本の常に増大する部分は、最早、それを使用する産業家には屬さない。産業家は銀行を通じてのみ、資本の處理權を持ち、銀行は産業家にたいして、資本の所有者を代表する。他方、銀行は、その資本の常に増大する部分を、産業に固定しなければならぬ。それと共に、銀行は、ますます大いなる範圍において、産業資本家と成る。かくの如くして實際において産業資本に轉換される銀行資本、貨幣形態の資本を、私は金融資本ファイナンツカピタルと名づける。」されば金融資本とは、「銀行が處理し、産業家が使用する資本」である。(註五〇)

この定義は、最重要な要因の一つ、即ち、生産及び資本の集積が、獨占を導き、且つ實際導いて來たほど高い程度に達したといふ點に關説してゐないだけ、不十分である。しかしヒルファードディングの説明一般に亘つて、特に、この定義が下されてゐる章の前一章において、資本主義的獨占の役割が指摘されてゐる、

生産の集積、それから生れて来る獨占、銀行と産業の融合又は合生——それが、金融資本の發生史であり、その觀念の内容である。

吾々は、今や、資本主義的獨占の「經濟」は、商品生産及び私有財産制の普遍的環境のうちにあつて、不可避免的に、金融寡頭政治の支配と成らざるを得ない所以を説明しなければならぬ、リーセル、シュルツェ、ゲヴァーニツ、リーフマン等の如き。ドイツ——獨りドイツだけでなく——ブルジョア科學の代表者等が、一人の例外もなく、帝國主義及び金融資本の擁護者であることは明らかである。彼等はこの寡頭政治形成の「機構」、その方法、その收得の量（「公認された」ものも、「公認されぬ」ものも）、それと議會との結托等、等を暴露しないで、反つて隠蔽し、美化する。彼等は、銀行重役の「責任感」に訴へたり、プロシヤ官吏の「義務感」を無限に高めたり、「監督」及び「法律化」に關する全然無益な法案の瑣事に大眞面目に没頭したり、次に示すリーフマン教授の「科學的」定義の如き、理論的遊戯に耽つたりして、この「呪はれた問題」を、勿體ぶつた曖昧至極な文句で片付けて仕舞ふ。リーフマン教授の定義によれば、「……商業とは、貨物の蒐集、貯藏を手段とし、その處理を目的とする、利得活動である。」（註五一）それならば、

まだ交換さへ知らなかつた原始人にも既に、商業があつたわけであり、社會主義社會にも、商業は存在するわけになる！

しかし金融寡頭政治の廣大な支配を示す無數の事實は、眼前に満ちあふれてゐる。されば、アメリカ、フランス、ドイツ等凡ての資本主義國家において、ブルジョア的立場から出で、金融寡頭政治の眞に近い構成ならびにその批評——勿論小ブルジョア的——を載せてゐる文献が現はれてゐる。

吾々は先づ、曩に一寸説き及んだ「企業參與組織」に、主たる注意を向けなければならぬ。

この組織に逸早く注意を拂つたドイツの經濟學者ヘイマンは、次のやうに述べてゐる。

「或る指導者が母會社を管理し、その母會社が娘會社を管理し、その娘會社が更に孫會社を管理する。その結果、大した資本を持たない人間が、生産の巨大な領域を支配することが出来るやうになる。何となれば資本の五〇％を支配し得ればいつでも母會社の管理し得るとすれば、孫會社の八百萬の資本を管理するためには、指導者は百萬の資本を持つておればよいからである。更にその指導者が工夫をこらせば、千六百萬、三千二百萬といつた風の大資本を管理する

ことが出来る。」(註五二)

しかし経験の實際に示すところに依ると、一個の株式會社の營業を決するためには、總株の四〇%を持つてゐるだけで十分である(註五三)。と云ふのは、散在せる小株主の一定數は、事實上、株主總會に参加する等のことが絶対に出来ないからである。ブルジョア詭辯家及び日和見主義者「社會主義者も亦」は、株所有の「民主化」から、「資本の民主化」、小生産の増大する意義が生ずるものと期待してゐるが、それは實際においては、金融寡頭政治の權力増加の一手段たるに過ぎない。この理由で、古い、「經驗をつんだ」資本主義國家では、小株式會社の設立が法律で許可されてゐる。ドイツでは一千馬克以下の株は、法律で許されてゐないので、ドイツの金融王等は、一磅(二十馬克)の株が既に法律で許可されてゐるイギリスを、嫉視してゐる。ドイツの最大産業家で、「金融王」の一人たるデー・フォン・シーメンスは、一九〇〇年六月七日、帝國議會において、一磅の株は實にイギリス帝國主義の基礎である、と喝破した。(註五四)

ロシアのマルクス主義の創始者として通つてゐるが、それでも、帝國主義はヨーロッパの或る一國の國民の悪い性質であると思つてゐるところの、ある意味で注目すべき一著述家*よりも、

件のドイツの巨商の方が、帝國主義の本質について、ヨリ「マルクス主義的」理解を持つてゐるやうである。

*それはブレハノフのことである。

しかし「企業參與組織」は、たゞに獨占者の權力を夥だしく増大せしめるに役立つばかりでなく、種々の得體の知れぬ、陋劣な仕事を勝手に行はしめ、公衆を瞞着させる、といふのは、形式的に見れば、法律によると、「母會社」の管理者は「娘會社」にたいして何等の責任がなく、娘會社は「獨立せるもの」とされて居り、母會社は娘會社の助けを借りて、ど、ん、な、こ、と、で、も「回轉」することが出来るからである。次の實例は雑誌「銀行」の一九一四年五月號から引き出したものである。

「例へば、カッセルの彈鋼株式會社は、先頃までは、ドイツにおける最も利益のある會社の一つであつたが、重役の方針が變つた結果、儲けがなくなつてしまひ、數年のうちに配當が一五%から零となつてしまつた。重役等は、その娘會社の一つで、公稱資本十萬馬克でしかないハシヤ會社へ、株主の承諾なくして、六百萬馬克を貸附けた。母會社の株式資本の殆んど三倍

に當たるこの取引について、母會社の貸借表には何事も記入されなかつた。この事實の隠蔽は、法律的には少しも差支へないことであり、商法の規定を少しも傷付けるものでなかつたから、丸二年間それを繼續することが出來た。この虚偽の貸借表に責任をもつて署名した母會社の重役會議長は、當時カッセルの商業會議所議長であつたし、今もさうである。その後、それが失策……(この言葉に筆者は引用符を附すべきであつた)であつたことが分り、……賣手の投賣りによつて彈鋼株が市場において一〇〇%方暴落した後始めて、株主等はそのハシヤ取引を知つたのである。

「……株式制度における全く日常普通のこの貸借表の見本によつて見れば、株式會社の重役等が、どう云ふわけで一般に個人企業家よりは、非常に無責任な氣持で、冒險を敢てするかど解せられる。彼等は近代的貸借表製作様式によつて容易に、その企てる冒險を株主の眼から隠蔽することが出來るばかりでなく、その主要利益關係者は、またそれによつて、適當な時期にその株式を手離し、以つて冒險の失敗から來る損失を免かれることが出來るのである。然るに個人企業家にあつては、彼の爲すこと的一切にたいして、責任を持たなければならぬ。

「多數の株式會社の貸借表は、かの中世の有名なパリンプゼステン（一種の羊皮紙）のやうなものである。上に書いてある肉筆の文字を削り取ると始めて、その下にある本統の意味をもつた記號を讀み取る事が出来る……」

「貸借表を不明瞭ならしめるための、最も簡単な、その故に最も多く用ひられる手段は、姉妹會社の設立又は合併と云ふ形式で、一個の統一的な經營を、多くの部分に分割するやり方である。この組織の利益あることは、種々の目的——合法的、非合法的の——から見て、極めて明らかであるから、この組織を採用しておらぬ大會社は、今日は最早例外としなければならぬ。」（註五五）

極めて廣範にこの組織を採つてゐる大獨占會社の實例として、筆者は後に説く有名なアルゲマイネ・エレクトリック・ゲゼルシャフト（アー・エー・ゲー）を記してゐる。一九二二年に、アー・エー・ゲーは百七十五個から二百個の會社に參與し、それらの會社を支配し、約十億五千萬馬克の資本を左右してゐると、見積られた。（註五六）

會計監督、決算報告、一定の決算様式の作成、その監督裁判所其他に關する一切の規定（お

人好しの教授や官吏は善き意圖の下に、即ち資本主義を擁護し、美化せんとする意圖の下にそうした諸の規定をもつて、公衆の注目を惹かうとする）——それらの一切は、こゝでは全然無意味である。何となれば、私有財産は神聖なものであり。株を買ひ、賣り、交換し、質入する等のことに關して、何人に向つて抗議することも出来ぬからである。

ロシアの大銀行において、この「企業參與組織」がどれだけの範圍に達してゐるかは、イー・アガードの報告から判斷することが出来る。彼は十五年間、露支銀行に務め一九一四年五月、『大銀行と世界市場』(註七五)といふ多少不正確な表題で、大著述を公にした人である。著者はロシアの大銀行を、(a)。「參與の様式の下に」活動するものと、(b)。「獨立的」のものとの、二つの群グルツペに分けてゐる。その「獨立」といふことを著者は勝乞に外國銀行からの獨立としてゐる。更に著者は第一の群を、(一)ドイツ參與、(二)イギリス參與、(三)フランス參與の、三つの小群に分ち、關係國家の大銀行の「參與」と支配を眼中に置いてゐる。著者はまた銀行資本を、「生産的」(商業及び産業)に使用されるものと、「投機的」(株式取引及び金融)に使用されるものに分けてゐる。その場合彼は、その固有の小ブルジョア改良主義的立場から、資本主

義を取扱ふ上に、第一の型の投資を他から分離し、そして後者を全然無くしてしまふことが出来るかと信じてゐるのである。

銀行株 (一九一三年十月—十一月)

ロシアの銀行

株(單位百萬ルーブル)

生産的 投機的 合計

(a)「參與の様式」にあるもの

一 ドイツ參與—四銀行 四一三・七 八五九・一 一、二七二・八

シベリヤ商業銀行

ロシア銀行、國際銀行

割引銀行

二 イギリス參與—二銀行 二三九・三 一六九・一 四〇八・四

ロシア商工銀行

露英銀行

三 フランス參與—五銀行

露亞銀行、私立銀行

アゾフ・ドン銀行、ユニオン銀行 七二一・八

六六一・二

一、三七三・〇

露佛商業銀行

十一銀行

一、三六四・八

一、六八九・四

三、〇五四・二

(b) 獨立のロシア銀行—八銀行

モスコイ商人銀行

ヴォルガ・カマ・商業銀行

イー・ドブヴェー・ユンケル株式會社

ペテルスブルグ商業銀行(前のローウユルベルグ)

モスコイ銀行(前のリヤブシンスキー)

デイスコント銀行、商業銀行、私立銀行

五〇四・二

三九一・一

八九五・三

總計

十九銀行

一、八六九・〇

二、〇八〇・五

三、九四九・五

この資料によれば、大銀行の「活動資本」殆んど四十億ルーブルの中、その四分の三以上即ち三十億以上は、結局、外國銀行就中パリ—(有名な三幅對、即ちバンク・ド・リュニオン・パリジ

アンヌ、バンク・ド・バリ・エ・デ・ペイバ、ソシエテ・ヂネラル）及びベルリン（特にドイツチェ・バンクとディスクونت・ゲゼルシャット）の銀行の姉妹會社たる銀行の資本である。

二つのロシアの大銀行「ロシア銀行」（ロシア外國貿易銀行）と「國際銀行」（ペトログラード國際商業銀行）とは、一九〇六年から一九一二年までに、その資本を四千四百萬ルーブルから九千八百萬ルーブルに、その準備金を千五百萬ルーブルから三千九百萬ルーブルに増加したが、その四分の三は、ドイツの資本である。前者はベルリンのドイツシュン・バンクの合コンツェルン同に屬し、後者はベルリンのディスクونت・ゲルシャフトのそれに屬してゐる。お人よしのアガードは、ベルリンの銀行が株の大部分をその手中に握り、そのためにロシアの株主が無力であることを、ひどく憤激してゐる。資本を輸出する國家は、勿論、甘い汁を吸ふ。例へば、ドイツチェ・バンクはシベリヤ商業銀行の株をベルリンへ持つて來て、殆んど一ケ年手鞆のなかにしまつておいた後で、一〇〇にたいする一九三の相場、すなはち殆んど二倍の相場で賣放し、それによつて、約六百萬ルーブルの利潤、即ちヒルファァーディングが「發起人利得」と名附けた利潤を、「儲けた」のである。

著者は、ペトログラードの大銀行の全「勢力」を、八十二億三千五百萬ルーブル若くは約八十二億五千萬ルーブルと概算し、それにたいして「參與」若くは一層正確に云へば外國銀行の支配を、左の如く分けてゐる。フランスの銀行—五五%、イギリスの銀行—一〇%、ドイツの銀行—三五%、而して著者の計算によれば、この營業資本の總額八十二億三千五百萬ルーブルのうち、三十六億三千五百萬ルーブル、即ちその四〇%以上は、プロデュゴル（石炭シンヂケート）、プロダメータ（鐵シンヂケート）のシンヂケート並に揮發油、金屬及びセメント・シンヂケートの資本である。かくロシアにおいても、資本主義獨占の構成に關聯して、銀行資本と産業資本との融合が、驚く可き前進を遂げたのである。

極く少數者の手に集積した事實上の獨占者である金融資本は、發起、發行業務、國債發行等の巨大な、常に増大する信用を把持し、全社會に向つて獨占主に貢物を納めしめ、以つて金融寡頭政治の支配を確立する。如何にアメリカのトラストが「經濟する」(ヒルファードング)かの遺口を示す無數の實例のうちから、一例をとる。一八八七年、ハヴメーヤーは十五個の小會社を合同して、一製糖トラストを設立した。その資本の合計は六百五十萬弗であつた、そのト

ラストの資本は、アメリカの用語で、謂ゆる「水を割られ」て、五千萬弗に騰つた。この「超資本化」は、未來の獨占利潤を勘定に入れたもので、恰かも鋼鐵トラスト——やはりアメリカの——が、常に新らしい鐵鑛山を買收しつゝ、未來の獨占利潤を勘定に入れてゐるのと同様である。而して實際、製糖トラストは、獨占價格をつくり、その七倍に「水を割られた」資本にたいして一〇%、設立に際して事實拂込まれた資本にたいして七〇%の配當を爲すことが出來たほどの、莫大な収益を擧げたのである！ 一九〇九年、このトラストは、九千萬弗の資本をもつてゐた。かくて二十二年間に、資本は十倍以上となつた。(註五八)

フランスでは金融寡頭政治の支配(一九〇八年に第五版を出したリーシの有名な書物は、「フランス金融寡頭政治反對論」と題してある)は、多少歪んだ形態をとつてゐる。四個の最大銀行は、有價證券の發行において、相對的の獨占でなく、「絶對的獨占」をほしきまゝにしてゐる。事實上それは、「大銀行のトラスト」である。獨占は、有價證券發行の獨占利潤を確保する。借款國の國債は通常、名目收益の九〇%以上を含まぬ。その一〇%は、銀行及び爾餘の仲介業者の手に歸する。それらの銀行は、四億法の露支公債で、八%を、八億法のロシア公債(一九

〇四年）で一〇％を。六千二百五十萬法のモロッコ公債で、一八％四分の二を儲けた。小高利貸資本として競争裡に入つたフランスの資本主義は、どえらい額の高利貸資本として、その發展を終る。「フランス人はヨーロッパの高利貸である」とリーシは云ふ。經濟生活のあらゆる關係は、この資本主義の變革によつて、深甚なる變化をとける。人口増加、工業、商業及び海運業が停止した場合にも、「フランスは高利貸によつて富むことが出来る。」八百萬法の資本を代表する五十人の人間が、四大銀行の二十億法の金を左右することが出来る。曩に説明した「企業參與組織」は、同様な結果を齎らしてゐる。即ちフランス最大銀行の一たるソシエテ・ヂェネラルは、その娘會社たる「エヂプト製糖會社」の社債六萬四千株を發行した。發行の相場は一五〇％である。即ち同銀行は一馬克毎に五十ペンニヒづゝ儲けた。其後この會社の配當が虚構であることが分り、「公衆」は九十萬法から百萬法を損害した。而して「ソシエテ・ヂェネラル」の重役の一人は製糖會社の重役會議の一員であつた。そんなわけであるから、リーシが次の如く結論せざるを得なかつたのも、驚く可きことではない。「フランス共和國は金融寡頭政治である。金融寡頭政治の完全な支配である。それは新聞紙竝に政府を支配してゐる。」（註五九）

金融資本の最重要なる取引としての、有價證券發行のもたらす異常に高い利益は、金融寡頭政治の發展と確立に方つて、極めて重大なる役目を務める。……「外國公債の引受及び賣出ほどの利益を生む仕事は、國內に一つもない。」——とドイツの雜誌「銀行」は書いてゐる。(註六〇)

「銀行の業務のうちで、有價證券の發行ほど大きな利得を齎らすものはない。」(註六一) 産業株の發行におけるプレミアムは、「ドイツチェン・オエコノミスト」誌の調査によれば、その平均は次の通りである。(註六二)

一八九五年	三八・六%	一八九八年	六七・七%
一八九六年	三六・一%	一八九九年	六六・九%
一八九七年	六六・七%	一九〇〇年	五五・二%

「一八九一年から一九〇〇年までの十ヶ年間において、ドイツの産業株だけで、十億馬克以上のプレミアムが、『儲け』られてゐる。」(註六三)

産業の好景氣の時には、金融資本の利潤がどえらく高まり、不景氣の時には小規模な、根底の薄弱な企業は潰滅する。然し、その場合、大銀行は「協同」して、棄値でその小企業を買収す

るか、又はそれを利益のあるやうに「整理」し、「組織替」をやる。損害を蒙つた企業の「整理」には、株式資本が減額される。即ち収入がヨリ少額の資本を土臺として分けられ、更に後にその少額の資本で計算される。又、利益が零に落ちてしまつた場合には新らたな資本が注ぎ込まれ、この資本がヨリ尠く評價された古い資本と結合されて、始めて十分の利潤をあける。序に、ヒルファアーディングはかう云つてゐる。この整理と組織替とは銀行にとつて二重の意義のある仕事である。第一に、儲けのある業務として、第二に、かゝる窮乏した會社を自己に隸屬させる絶好の機會として。

一例をあける。ドルムンドのベルゲバウ・テクチエンゲゼルシャフト・ウニオン鑛山株式會社「合 同」は、一八七二年に設立された。殆んど四千萬馬克に達する株式が拂込まれ、最初の年に一二%の配當がなされたので、株の相場は一七〇%まで騰貴した。金融資本は、二千八百馬克ばかりの「少額」を投資しながら甘い汁を吸つた。この會社の設立に際しては、當時その資本三億馬克に達してゐた大銀行のデイスコント・ゲゼルシャフトが、主要な役目を演じた。その後、この合同の配當が零に落ちてしまつた。株主等は、資本を「減額する」こと、即ち、その投資金額の全部を失はぬために、その一部を放棄